2010 年度 FD フォーラム成果報告集

大学連携における遠隔授業配信

～実践事例紹介と将来的展望～

高等教育コンソーシアム信州

2011 年 1 月 22 日

目次

開催のご挨拶　赤羽貞幸　1

第１部　基調報告

遠隔授業による「ドイツ語（初級）Ⅰ・Ⅱ」　松岡幸司　3
- 遠隔双方向による初修外国語授業は成り立つのか？ -
開講にあたって／授業概要／問題点と解決の試み／おわりに

遠隔授業を使ってゼミ形式の授業に挑戦する　宮越幸代　7
- 2010 年度「国際看護学」の配信 -
はじめに／2010 年度遠隔授業「国際看護学」の概要／結果／考察／まとめ／さいごに

「たてなおしの英語」　田村亮子　15
- 遠隔授業システムが作る新しい英文法リメディアル教育 -
『たてなおしの英語』がめざすこと／eChes を使用した「たてなおしの英語」の特徴／「たてなおしの英語」をどのように活用することができるか？／おわりに

コンソ配信授業『新聞と私たちの社会』の報告　加藤鉱三　21
授業について／遠隔授業で演習形式は可能か？／遠隔授業で注意すべきことは何か？／遠隔授業で必要不可欠なもの

第２部　パネルディスカッション

大学連携における遠隔授業配信　矢部正之　25
- パネルディスカッション -
はじめに／ディスカッションのあらまし／質疑応答の詳細

資料

FD フォーラムアンケート集計結果　33

ポスター　41

開催のご挨拶

推進チームリーダー
赤羽　貞幸

「高等教育コンソーシアム信州」のチームリーダーを務めています，信州大学教学担当理事・副学長の赤羽と申します．本日は，本当に大勢の方にお集まりいただきまして感謝しております．

「高等教育コンソーシアム信州」は，長野県内にあります 4 年制の 8 大学によって運営されていますコンソーシアムです．平成 20 年度の文部科学省公募事業 :「戦略的大学連携支援事業」に採択されましたプログラムに沿って運営されてきており，本年 3 年目，最後の年を迎え，現在そのまとめを行っている最中です．

これまで 8 大学を高速通信ネットワークでつなぎ，遠隔講義システムを利用して，毎月定例の「K^3 茶論」， SD（Staff Development）あるいは FD（Faculty Development）に関するフォーラム，コンソーシアムに関するそれぞれの部門の会議，また学生向けの合同就職説明会を開催して参りました．なかでも主要な取り組みの 1 つが，本日報告されます，長野県内の大学単位互換制度を活用した，いわゆる遠隔授業の配信です．

遠隔授業の配信は，平成 21 年度に試験的に実施された後，本年度から本格的に取り組み，前期 12 授業，後期 12 授業の合計 24 授業を開講致しました．実際に開講のための準備，あるいは開講してみると様々な問題があり，特に配信授業の授業計画には大変骨を折っていただきました．また，受講生の受講手続きの検討や授業を配信する上での技術的なサポートなど，多々の問題があり，その都度なんとか解決しながら運営をして参りました．

本日第 1 部では，以上のような内容を，遠隔授業に積極的に参加され実際に授業をしていただきました先生方，システムの運営・管理をしていただきました方々に基調報告をしていただきます．それから第 2 部では，遠隔授業の課題や将来的な展望につきまして，関係者の皆さまにご意見をいただきたいと思っております．

本日のこのフォーラムにおける討論を，今後の，特に次年度以降の開講に活かして行くことを考えておりますので，様々なご意見をいただければと思っております．そして，この遠隔授業がコンソーシアムに参加されておりますそれぞれの大学にとりまして，有効な役割を果たす事を多いに期待しています．

それでは，これから活発なご討議をよろしくお願い致します．

遠隔授業による「ドイツ語（初級）Ⅰ・Ⅱ」

－遠隔双方向による初修外国語授業は成り立つのか？－

松岡　幸司

信州大学全学教育機構

＜あらまし＞　今年度開講した「ドイツ語（初級）Ⅰ・Ⅱ」の授業について，開講前に想定した問題点と開講後に立ちはだかった問題点を挙げ，その具体的な対処法について報告する．ABC に始まる発音指導のような，初修外国語科目という特殊性から発生する問題点を「巡回補習」によって解消したとはいえ，それは「遠隔」授業という前提を否定するものとも言える．それでは他に方法はないのか？本稿は，お読みになるみなさんへの問いかけでもある．

＜キーワード＞　遠隔外国語授業，リアル感・現実感覚，巡回補習

1.　開講にあたって

2009 年秋頃に本コンソーシアムの遠隔授業で開講する授業を検討していた際に,「自分の可能性を拡げたい」,「初修外国語が一つあってもよいのではないか」と思い，あまり深く考えずに自分がすでに開講していた「ドイツ語（初級）」の授業を提案した．しかし，いざ実際にシラバスを書く際になって,「あんなこと言わなければよかった」と痛切な後悔に襲われた．授業のイメージが全くといってよいほど湧かないのである．目の前にいない学生にどう対応すればよいのか？つまりは授業のリアル感を（自分にとっても）どう出せばよいのだろうか？また，授業の手法も浮かばない．例えば発音指導である．どのように行えばいいのか？加えてそれをチェックするにはどうすればよいのか？もう一つ，各学生の理解度の確認方法である. これは小テストや宿題ということではなく，授業中の学生の表情を通して，各瞬間のリアルタイムの理解度確認である．画面上の学生の表情を読み取ることができるのだろうか？不安は募っていく．

しかし，それでもやることには意味がある．一人でも多くの学生にチャンスを提供したい．在籍している大学のカリキュラムには英語しかなくても，英語以外の外国語に触れる機会を提供し，英語ではできない異文化体験をしてもらいたい．そして，私自身も一教師として，学生と一緒に成長したい，やる気を感じて応えたい．それによって，今までに経験したことのない「新しい何か」を求め，教員として成長したい．こんな思いが打ち勝った．幸い，同僚や多くのドイツ語教員仲間たちからの助言もあり，なんとか一年やり通した．受講学生たちの満足度も悪くない．

本稿では，この授業の概要の報告とともに成果と問題点，そして次年度への展望を記す．

2.　授業概要

まずは授業の概要を説明する．

2.1　クラスと受講学生

年度初めに冊子やビデオシラバスを使って受講学生の募集が行われた．その結果，以下のような学生たちが集まった．

		Ⅰ（前期）	Ⅱ（後期）
受講学生総数		36	21
信州大	松本キャンパス	16	10
	長野キャンパス（教育）	2	2
	伊那キャンパス	3	0
清泉女学院大学		7	6
佐久大学		8	3

学生の専攻や学年はばらばらで，１年生から４年生までそろっていた．教科書は，会話によるペアワークを取り入れることで相互確認ができるように，と考え，ややコミュニカティヴな教科書（近藤/小林/新倉/松尾：『Dialog ベーシック版＜新版＞』郁文堂）を使用した．

2.2　サイクル

遠隔授業を行う際には，授業から次の授業までが一つのサイクルとなって，それが繰り返されていく．本授業では大体次のような週のサイクルとなった（*青字斜字体部分*は学生が行う作業である）．

月曜日５限（16:20~17:50）：授業
授業終了直後に授業内容を eChes（LMS）上にアップ
（授業で使用した Power Point ファイルも含む）
eChes にアクセスし，授業内容および宿題の確認を行い，火曜日の 12:00 までに毎回出題される確認課題をオンライン提出する（出席確認を兼ねる）
金曜日の昼頃までに，次回の授業プリントを eChes 上にアップ
授業までにプリントをダウンロード&プリントアウトして授業に備える

このように映っている

学期あるいは年度の初めからこのサイクルが上手く回ったわけではない．LMS はおろか PC 自体，そして PC による e-mail に慣れていない学生への指導が必要であり，加えて LMS に受講学生が登録されるまでの期間は，使える機能に制限があるので，このようなサイクルが定着したのは前期の半ばくらいであったと思われる．

3.　問題点と解決の試み

3.1　授業実施における問題点

先に記したように，シラバス作成の段階から授業運営についてはいくつかの問題があり，実際に授業が始まってからも新たな問題に直面した．ここでは，それらの問題点と，実際に行った対処について述べる．

3.1.1　授業開始前に想定していた問題点

大きく分けて以下の４つの問題点が念頭にあった．

・遠隔地とのコミュニケーションが上手くいくか
・遠隔地学生の理解度を把握できるか
・発音指導ができるか
・学生の側から気軽に質問できるか

3.1.2　授業を開始してから発生した・気づいた問題点

実際に授業が始まり，実は様々な，予測していなかった問題が毎時間生じた．そのうちの，以下に挙げる２点が特に大きなものであった．

・発音練習時の時差の問題
・（やはり）遠隔地学生の様子/表情がわからない

これらの問題点は２つに大別できる．それは，「教師の側にとっての問題点」と「学生の側にとっての問題点」である．前者については，学生によってはそれほど問題に思っていなかったものもあるかもしれない．しかし教師が授業を運営していくにあたって，どうしても気になってしまう点でもあった．後者については，ある意味では学生にとって切実な問題であったと思われる．

3.2　問題点解決の試み

それぞれの問題点にどのように対処したか，その実際のアクションを以下に挙げる．

・遠隔地とのコミュニケーションが上手くいくか
・学生の側から気軽に質問できるか

この２点は連動している．初めて会う教員に対して，受講学生が積極的にアプローチできるか，ということは，実は遠隔授業に限らず，通常の授業においても，実は大きな問題である．初回の授業時に教員に対して抱く第一印象は，大げさに言えばその学期全体にわたっての学生のモティヴェーションに大きく影響する．ましてや，全く知らない教員が目の前におらず，授業自体も他の大学/学部のためのものであればなおさらであろう．

そのような状況で筆者の行ったのは，「気さくに話しかけ，リアル感を持たせる」ということである．外国語学習に限らないが，自分が勉強している対象について「現実的な関係・感覚」を抱くことができなければ，その学科目は「ただの勉強対象」に過ぎない．教員にしても，「先生」に過ぎないのだ．そうではなく，この授業は，この学習内容は，そしてこの教員は，自分と現実的な関

係をもっている，という感覚こそが必要であろう．実際に学生たちからも，少しずつではあるが質問や確認の語りかけが増えていった．

・遠隔地学生の理解度を把握できるか

これは「習得度」という意味ではなく，学生のその場での反応や表情から彼らの理解度を読み取る，ということである．これは非常に難しかった．常日頃，あまり意識せずに行っていたのだ，ということを痛切に感じた．その場ではそこそこできてわかっているように感じられるのだが，実際に課題・宿題のチェックをするとそんなことはなく，時として散々な結果に終わったこともある．この問題への対処は後述する．

・発音指導ができるか

・発音練習時の時差の問題

この２点も連動している．日本語や英語にはない音を出すために口の形を示したり指示したりしても，なかなか伝わらず，音の違い（例えば o と ö ）をなかなかつかめない学生が多かった．加えて，実際に発音練習（教師の後に続けて発音する）の場合，目の前のリアル対面学生とそれぞれの遠隔会場からの声に時差があり，マイクを通すためか，全員の声が一つにまとまって聞こえてくるので，細かい発音のチェックが難しい．

この問題への対処も後述する．

・（やはり）遠隔地学生の様子/表情がわからない

学生たちが授業に対するリアル感を持つようになって確かに発言は増えていったのだが，悲しいかな，発言してくれるまで遠隔教室の学生たちの表情がわからないのはそのままであった．

このように，どうしても対処法が思いつかなかったものをまとめると「学生のレスポンスを上手く受け止めることができない／届いてこない」と言い換えられるだろう．

3.3　問題点の解決に向けて

3.3.1　理解の深化

「理解度」に関しては，解説の際に，口頭で済まさずに「指示性」を挙げることで焦点をより明確にすることを試みた．そのために，カメラ・画面の使い方を変えてみた．遠隔学生の目の前には，PC の画面と遠隔教室の画面（例えば教員の姿）が映っているわけだが，後者の方を，教員の姿ではなく，メイン教室のホワイトボードに映っている画面にしてみた．そして，ホワイトボードに映った PC 画面に重ね書きを行い，解説している点

フォーカシング

についてのフォーカシングを行いつつ，必要に応じて用例を加えていったのである．学生たちはもちろんこの「重ね書き」をプリントに書き込んでいくわけだが，その際に書き込む時間を用意することによって，学生たちはその内容を反芻することができる．そして「あれ，よくわからないなぁ」となった時，授業はまだ進んでいないので，授業を中断する心配なく質問や確認の発言をすることができるのだ．これはなかなか効果があったように思われる．

3.3.2　「リアル対面補習」による補足

しかし，発音についてはどうしようもなかった．そこで，他の問題も合わせて一挙に解決に動こう，と考え，遠隔教室の「巡回補習」を始めた．つまり，お互いに都合の良い時に教師が遠隔地に出向いていくのである．これは想像以上の効果があった．そのうちの３点を挙げてみる．

・授業/教師に対する現実感覚の発生

リアルに対面することで，教師と学生は「お互いに」テレビの向こうの人ではなくなる．それによって学生にとって教員は「ただの先生」ではなく「自分（たち）の先生」になるのだ．初めて巡回に行った大学の教室に入ると，学生たちがこぼれんばかりの笑みを浮かべて拍手で迎えてくれた．「あぁ，こんなに表情が豊かな学生たちだったんだ！」とても嬉しくなった．これは，私にとっても彼らが「自分の学生」になった瞬間であった．

こうして実際に会うと，その後の遠隔授業でも，たとえ画面の向こうであっても親近感というか，ひとりひとりの学生に対して現実感をもって授業を行うことができるようになった．画面の向こうからは，問題を解く際の独り言や相談，教師の脱線話に対する笑い声が聞こえるようになり，学生たちのレスポンスも豊かになった．

・学生の理解度の把握

実際に目の前に立ち，直接学生たちの表情を見ていると，彼らの理解度が直接伝わってくる．巡回補習の際に

は，基本的には学生たちの質問を受ける形で授業を進めるのだが，ある瞬間に彼らの顔が明るくなったり微笑んだりする．この細かい表情はやはり画面上ではなかなかつかめない．そしてこの表情の変化や理解が深まった瞬間を経験すると，次の遠隔授業からは教師も学生もお互いにその瞬間を待つべく，注意力を増していく．また，学生の側でも，「教師に伝えれば応えてくれる」という意識が芽生え，授業時間内やメールでの質問をするようになってくる．

・発音指導

これは大いに成果の上がった点である．口の形が変化すれば音も違ってくる，ということを目の前で実演され，視覚的・聴覚的に確認できることで，発音に対する学生の注意力が向上した．また，直接の発音指導を行ったことで，問題練習の際に各学生に音読をさせても，嫌がらずに音読し，それによって当の学生以外の発音チェックの機会を提供することにもなった．

3.3.3　巡回補習について

個人的には，遠隔授業における「巡回」補習は**反則技**であると考えている．今年度は，前期は５・６・７月に一度ずつ，後期は11･12･１月に一度ずつ行ったが，恒常的にこのような「補習」を「巡回」で行っていては，遠隔授業の意義も揺らいでくるように思う．しかし，下記のような成果もあることは事実である．

・各学生の個別認識ができた
・各学生の発音指導ができた
・各学生の理解度を，その都度確認できた
　⇒それ以後の授業に反映させることができた
・学生たちの表情・反応が豊かになってきた
・それにより，実際に会った時のイメージで対応できた

このような成果を考えると，来年度は学期に一回程度の出張補習程度で抑えつつ，代替手段・手法を考えたいと思っている．

発音指導などは，「学生たちに録音させてメール添付で送らせればよい」というようなアドヴァイスももらったのであるが，LMS を使いこなすのに四苦八苦している学生にそこまでの負担を強いることは，私にはできない．しかしそれでも「遠隔」という制限のもとで何ができるか，という点について，今後も考えていきたい．

3.4　その他の成果

eChes（本コンソーシアムの LMS）を使用することで，学生たちは強制的に PC を使わざるを得なくなった．これは実は遠隔授業の重要な成果である，と個人的には考えている．メールといえば携帯電話でしか行わない学生に，メールよりもっと高度な PC 使用をマスターさせるわけである．これは大きな成果だろう．

加えて，教師としての能力の向上・資質の開発（FD）としても LMS の使用は大きな意味を持つ．実際の授業を補足する手段として LMS は，私のような者にとっては，その能力の幅を大きく広げるものとなっている．

個人的に残念だったのは，（機材の問題なのだが）画面上で学生と面と向かえなかった点である．

学生と向かい合えない

私が遠隔教室の学生の方を向くと，上の写真のように画面を見ることになる．しかしこの場合，遠隔教室の学生たちは，この写真の向きのように私の横顔を見ることになる．今後は，カメラが設置されている方向に，この左端の画面を見ることのできるモニターが設置されることを期待している．

4.　おわりに

一年間遠隔授業（ドイツ語の他に講義課目も担当している）を行ってきたが，本音を言ってしまえば，「やはり生の授業にはかわないのではないか･･･」と思う．しかし，「遠隔」という条件＝制限を前提に取り組めば，双方向のやり方次第では，学生の理解度・習得度・満足度をかなり上げることは可能であると考えている．

学生の側から考えてみれば，自分の大学・学部ではカリキュラムにない/開講されていない授業を受講することができるわけで，この点は学生による授業評価アンケートの回答でもかなり高く評価されている．

そのような事実を踏まえれば，私としては，「ドイツ語に触れる機会を提供」し，「継続して自習していける力をつける」努力をするモティヴェーションになる．

４月からは，新たに「中級」の授業を開講する．遠隔授業によって，学生の，そして教師の可能性を高めていきたいと思っている．

遠隔授業を使って
ゼミ形式の授業に挑戦する

－2010 年度「国際看護学」の配信－

宮越　幸代

長野県看護大学

＜あらまし＞　2010 年度前期に長野県看護大学から配信した遠隔授業「国際看護学」について，開講期間の中間と終了時に実施した履修生による授業評価アンケート結果を元に，遠隔授業の有効性と運用上の課題について分析した．その結果，授業の一部にゼミ形式を取り入れた本授業は，「看護の実践と統合」という新分野が看護基礎教育カリキュラムに設置された際のねらいや本授業の学習目標の到達に，効果的であることがわかった．一方，ゼミの進行やとりまとめなどの意見交換に関する授業運営能力の向上と，遠隔授業システムの運用に対する熟練は，授業実施者自身の課題であり，それらがゼミ形式による「国際看護学」の遠隔授業をより効果的に行うための鍵となることが導かれた．

＜キーワード＞　国際看護，遠隔授業，e-Learning

1.　はじめに

看護基礎教育においては，2008 年に改正された新看護基礎教育カリキュラムで，新たに「看護の統合と実践」分野が新設された．その内容は「国際的な広い視野に基づき，看護師として諸外国との協力ができるような看護師を養成すること」と明示されている．長野県看護大学では，開学以来，豊かな人間性と幅広い視野を養うという教育目標の元に，国際化への対応として４学年を通しての外国語科目が設置され，国際看護学講座はこれまでに「異文化看護学」，「異文化看護学演習」，「国際看護学」，「国際看護学実習」などの授業科目を開講してきた．

このたびは，長野県看護大学が遠隔授業として配信した「国際看護学」について，履修生による授業評価アンケート結果をもとに，遠隔授業の有効性と運用上の課題について検討する．

2.　2010 年遠隔授業「国際看護学」の概要

長野県看護大学（以下，「本学」）が 2010 年度に配信した遠隔授業「国際看護学」（以下，「本授業」）は，前期（４月～８月）毎週金曜日，本学第Ⅱ限目（10：40～90 分間）に設定され，合計 15 回実施された．本学では，学部３学年次の選択科目として，４学年次の「国際看護実習」の先修要件に指定され，例年，10 名前後が履修している．

2.1　本授業の学習目標

本授業では，国際看護の実践に先立ち基本となる国際保健医療に関する知識や方法を学ぶと同時に，国際看護が求められる場面に関する事例を元に，履修生による意見交換（ここでいう「ゼミ形式」）を取り入れた授業を計画している．履修生にはレポート（発言も含む）や中間試験・最終試験において，授業で学んだことを元に，自分の考えを根拠と共に説明できることを期待する．つまり，国際保健医療に関する基礎的な知識・技術に加え，幅広い視野で対象をとらえ，国際看護の場で求められる判断力を養うことをめざす．

具体的な学習目標は，次の通りである．

1）　国際看護の実践に必要な基礎的知識と方法を学び，国や地域，文化や人種などあらゆる違いを超えた看護の実践方法について考える（主に，開発途上国を中心とした国際協力）．

表１「国際看護学」の授業概要

回	月日	授業内容	備考	本学	信大
1	4月16日（金）	履修生自己紹介・オリエンテーション		1	
2	4月23日（金）	「国際看護をめざす意味」に関する講義・意見交換			
3	5月7日（金）	★「国際看護実習」に関する説明と実習の成果に関する講義	信大が振替授業のため本学履修生のみ受講		2
4	5月14日（金）	「国際看護で学ぶこと」と「国際看護の場と対象」に関する講義・意見交換			
5	5月21日（金）	「国際看護の活動」に関する講義		1	
6	5月28日（金）	「日本と海外の看護や看護教育の違い」に関する講義・意見交換		2	
7	6月4日（金）	「国際看護をめぐる学問領域」「国際保健医療」に関する講義	信大が振替授業となり，本学履修生のみ受講		2
8	6月11日（金）	「国際看護に関連する機関と活動における連携」に関する講義	授業アンケート（中間評価）	1	
9	6月18日（金）	「国際協力の原則」に関する講義と「国際看護が求められる場面」に関する意見交換		2	
10	6月25日（金）	「国際看護協力がめざすもの協力の原則」に関する講義		2	
11	7月2日（金）	中間試験 「国際看護協力の実際」に関する体験談１	授業者は信大に赴き試験監督と授業の進行を行う（長野県看護大学では大学院生のTAが行う）		
12	7月16日（金）	「プライマリ・ヘルス・ケアにおける看護の役割」と「ミレニアム開発目標」に関する講義 「国際看護協力の実際」に関する体験談２		2	2
13	7月23日（金）	「国際看護協力後の可能性・社会還元」に関する講義・意見交換		1	
14	7月30日（金）	「国際看護協力後の社会還元」に関する講義・意見交換 授業のまとめ・最終試験	授業アンケート（最終評価）		
15	8月6日（金）	★「国際看護学」を学んだ感想や展望に関する履修生間の意見交換（信大履修生が長野県看護大学に来学）	最終回に履修不可能な学生（課外活動や信大の夏休み）が出たため予定変更	3	1

2）国際看護の場面における具体的な状況判断が必要な事例への対処について検討し，既習の知識や技術，これまでの経験をもとに，具体的な看護の実践方法やその根拠について説明できる．

2）国や地域，文化や人種などあらゆる違いを超えた国際看護の実践を国内外に活かす方法を考える．

2.2　本授業の概要

全15回の日程および内容は，表１の通りであった．

2.3　対象資料となった授業アンケート

履修生が記述・提出した授業評価アンケート（中間評価および最終評価）のうち，本報告では遠隔授業の有効性と運用上の課題に関する結果を抜粋した．

アンケート結果や写真・画像の公開に対する倫理的配慮としては，事前に長野県看護大学倫理委員会での審査を受け，承認を得た（平成23年度倫理審査番号#38）．さらに，調査主旨および倫理的配慮について文書と口頭で説明した後，履修生各自の直筆署名による同意を確認した，アンケートは，中間評価と最終評価の２回とも履修生全員分（11名）を回収した．

3.　結果

3.1　履修生の概要

図１に示した通り，本授業に履修登録し，単位を取得した履修生は本学９名（３学年７名，編入１学年２名）および信州大学（以下，「信大」）２名（医学部医学科１学年１名，医学部保健学科１学年１名）の合計 11 名であった．高等教育コンソーシアム信州が実施する遠隔授業2010年度前期12科目の履修生合計594名のうち「遠隔地受講者」は 55 名であった．本学の履修生９名のうち，他大学や専門学校を卒業し社会経験のある者が４名，看護師として２年以上の国際協力経験のある者が１名で

あった.

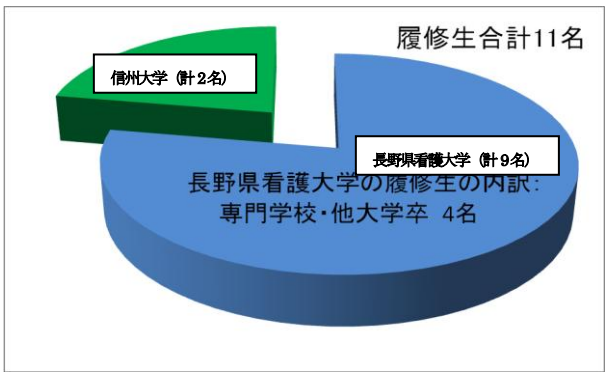


図１　「国際看護学」の履修生とその背景

3.2　システムに対する不慣れや抵抗

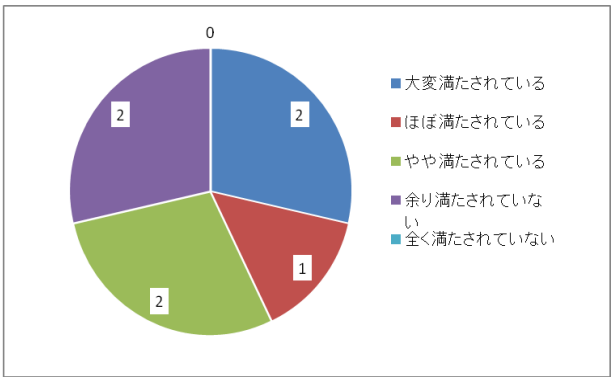


図２　中間評価結設問：授業に期待したことはどの程度満たされているかについての回答

中間評価で「本授業に期待したこと」が「大変満たされている」および「ほぼ満たされている」理由としては「意見交換が増えてきて，他大学とも互いに発言できる場が多くなってきた」，「実際の画像や写真が多いのでわかりやすい」，「信大との意見交換によって多様な意見を聞くことができ，他の講義ではできない貴重な経験となっている」と述べられていた.

一方,「余り満たされていない」と回答した理由は，システムの不備やシステム利用に対する授業実施者と履修生の不慣れが原因となっていた．具体的には,「システムのトラブルで授業の開始が遅れてしまうのは残念なので，改善してほしい」,「すごく満足しているがシステムが確実だとなおよい」,「システムが順調でなかったり，整っていないので，やりにくい」などのシステムの不調に関する要望があった．また，自由記述欄でも「マイクで話さねばならないのは緊張する」,「ビデオ録画されていることが教員と学生の自由を奪い，教員の良さも生かしきれていない」,「先生の授業ではルールがなく，堅苦しい授業が多い中で，唯一楽しめる授業であったが，今回は遠隔やeChes（E-learning for the Consortium of Higher Education in Shinshu：「高等教育コンソーシアム信州」の学習管理システム）をしなければいけないことで，縛られている感があり，楽しめなくなった」など，授業で使用するマイクやビデオ録画，遠隔授業の雰囲気そのものに抵抗を示す意見が認められた.

また,「ネット環境のあるところでeChesを使ってレポートを提出しなければならないのが負担」,「意見交換できたり，学内にない科目を履修できるのはよいが，システムを使わねばならないことには不便を感じる」（複数意見）という指摘があった．さらに「eChes上にアップされた資料の作成バージョンと自分が使用するパソコンのバージョンが異なるため資料が開けなかった」という指摘もあった.

最終評価では，このように通常授業とは異なる緊張感やシステムやネットを使わねばならない煩わしさを理由に,「遠隔授業に否定的であり続けた履修生」と，授業実施者がシステムに慣れ，意見交換が多く取り入れられるようになったという理由から，授業の半ばより「遠隔授業に面白さを感じるようになった履修生」に二極分化した.

表２　遠隔授業システムで発生した不具合

回	日程	システムで発生した不具合
1	4月16日（金）	配信側のシステム操作ボードがキー操作と連動しない
2	4月23日（金）	２～３分間の通信切断あり（原因不明）
3	5月7日（金）	
4	5月14日（金）	配信側の導入時のログイン操作の誤りで，最初の数分間信大に配信されない
5	5月21日（金）	
6	5月28日（金）	マイクの音声が入らない（電池切れ２回と原因不明１回）
7	6月4日（金）	
8	6月11日（金）	
9	6月18日（金）	
10	6月25日（金）	
11	7月2日（金）	配信側の導入時のディスプレイ選択ミスにより，最初の数分間信大に配信されない
12	7月16日（金）	ネットワークのシステムトラブルで信大履修生が履修できず→信大履修生には後日のビデオ履修を促す
13	7月23日（金）	配信側の導入後のディスプレイ選択ミスにより，最初の数分間信大に配信されない 授業実施者のパワーポイント操作がキー操作と連動しない
14	7月30日（金）	
15	8月6日（金）	信大履修生が本学に来学したため，システムを使用せず

システム上で実際に発生した不具合については，表２に示した．システム上の不具合が発生する可能性については，配信側として最も懸念していた問題であった．しかし，実際のネットワークのトラブルは一度のみであった．その他には，主に操作への不慣れや不手際が原因のトラブル，配信側の機器作動トラブル，一時的な通信切断トラブルであったがいずれも深刻なものではなかった．配信側の操作ボードやモニター位置の不都合などは，授業回数を重ねるとともに改善を工夫し，解消していった．

3.3　キャンパス間で異なる時間割や学年歴

システムのトラブル以外に信大生がリアルタイムで本授業を履修できないことは２回あった．それは５月の連休に対する信大の時間割の振替制度（本授業の開講日に信大では別の日の時間割が割り当てられる）と，夏季休暇（最終開講日の８月は信大の夏休み期間となる）であった．５月の連休に際しては，このような時間割や学年歴の違いによって信大生が履修できないことを授業実施者が予測できていなかったため，急遽，授業内容を本学の履修生を対象とした４学年次の「国際看護実習」に関する解説に切り替えた．また，その他の回では，信大生に当該授業の録画ビデオでの履修とレポート提出を指示するという対応をとった．

時間割に関しては，履修生もアンケートの自由記述に「履修したくでも大学間で受講時間を共通に設定するには限界があると思う」と，履修の限界を指摘した．

さらに，本授業の評価とは直接関連しないが，遠隔授業の科目設定等に対する意見として，「遠隔授業で学べる科目をもっと増やしてほしい」，「医学生と共に学べる授業を希望，単科大学なので他職種との連携を学びたい」，「信大にはない自分の学びたいこと（科目）が学べてよかった」という記述が認められた．

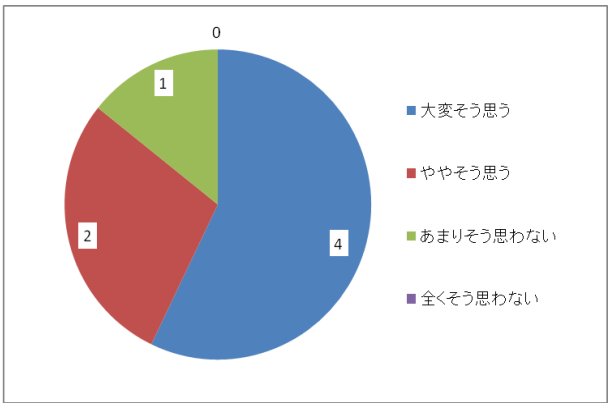


図３　中間評価結設問：国際看護学を「引き続き学びたい」と思うかについての回答

3.4　意見交換の意義と方法に対する要望

中間評価で「『国際看護学』を引き続き学びたいと思うか」という設問に対して，「大変そう思う」と回答した履修生は，「少人数での他大学との授業により，様々な意見交換ができる」 複数意見），「分からないことがその場で質問でき，自分のペースにあった学習ができる 」という理由をあげていた．

また，履修生にとって「本授業に期待したこと」がどの程度「満たされているか」を問う質問に対しては，意見交換ができることや，海外の看護実践に関する実際の写真や動画が見られることを「本授業に期待したことが『満たされている』」理由にあげていた．

さらに，実際の意見交換の場面でも，本学の履修生の間に信大の（自分たちとは異なる学年や学部生の）異なった視点での意見に目を見張る姿や「驚いた」，「感動した」という感想の記述が頻繁に認められた．自由記述でも「他大学との学習はとても有意義で色々な意見を聞けたり，視点も広がる」という意見が認められた．

このように中間評価で，履修生が異なるキャンパス間の意見交換に積極的な関心を寄せている結果が認められた後からの授業では，なるべく発言や意見交換の時間を多くするようにした．履修生は授業の開講当初，マイクを向ければ発言する傾向が認められていたが，授業を重ねるにつれ，自分から発言したり，次第に他の意見も集中して聴く様子が認められるようになった．授業実施者がモニター越しの指名を提案すると，最初は恥ずかしさを見せていたが，次第に履修生同士がモニター越しに指名することに慣れ，異なった意見を活発に掘り起こすようにもなっていった．

一方，自由記述の中には「たまに意見交換のテーマがわかりづらかったため，困ってしまうことがあった（写真が明瞭でなかった時など）」，「できれば２時間続きの授業の方がより内容が深まったのではないかと思う」，「授業最後のディスカッションは先生がまとめずに自由意見をそのまま受け止めたら良かったと思った」，「最後の意見交換では時間がなかったのと，たくさんのテーマがごっちゃになっていたので皆が納得のいく意見交換とはならなかった」というテーマの設定や進行方法への指摘があった．

4.　考察

4.1　ゼミに効果的な履修生の確保

看護基礎カリキュラムの統合分野に設けられた「国際看護学」の授業は，基本的な看護の知識・技術のほかに，

日本以外の看護の対象や看護職者をとりまく諸状況を理解するための多くの関連知識がある．それゆえに，多くの知識の中から本授業で確認や提供をしておきたい内容の精選と，思考や判断する力をつけるための意見交換を効果的に配置する工夫が不可欠であった．本授業では，このように既習した学習内容の想起・復習に加えて新たな知識・知見を獲得することが求められる．本授業のアンケート結果では，履修生は特に学科や学年を超えた意見交換に授業の意義を見出しており，それはキャンパスを超えた遠隔授業であるからこそ，その独特の効果を発揮できたと考えられた．

しかし，本授業に対する他大学の履修生数は，前期12科目の遠隔地受講者55名のうち２名と決して多くなく，次年度に向けた課題の一つは，他大学の履修生を確保することである．キャンパスを越えた意見交換に必要な履修生数を確保するには，授業ガイダンスの方法（ビデオシラバスの Web 公開以外にも）やガイダンスの開催時期の工夫，大学間の時間割調整などによって積極的に履修希望者の関心を呼び起こすと同時に，履修を希望する科目が履修できるよう学生の便宜を図る必要がある．

4.2　遠隔授業システムの円滑な運用

中間評価で，本授業に期待したことが余り満たされていないと回答した理由に，「システムの不具合」や「システムを使わねばならないことの面倒さ」があげられ，授業で使用するシステムは，履修生にとって初めて参加する遠隔授業への抵抗感につながっていったと考えられた．そして最終的には，このようなシステムへの抵抗が「遠隔授業に否定的であり続けた履修生」と，「遠隔授業の面白さを感じようになった履修生」という二極分化の原因となったことが伺われた．

遠隔授業を実体験するまで - つまり授業初日の本番まで - ，履修生はもちろん，遠隔授業に初めて挑戦する授業実施者自身も，モニター越しの意見交換の際に発生する「微妙な音声のずれ」が全く予測できていなかった．そのためそれらの適切なタイミングに慣れ，モニター越しの声かけや意見交換が円滑にできるようになるまでは，配信側も受信側も互いに緊張し，互いの発声の「ずれ」や「かぶり」，発言の「間（ま）の取り方」，発音の聞き取りにくさに抵抗を感じていたことは否めない．

また，「ビデオ録画が教員と学生の自由を奪い，教員の良さも生かしきれていない」，「遠隔や eChes に縛られてる感があり，楽しめなくなった」などの意見は，このようなシステムに対する授業実施者の緊張を履修生が敏感に察知したためと考えられた．さらに eChes 上にアップされた資料が履修生のパソコンのバージョンとは異なるため開けないという問題は，履修生の意見がなければ気づくことができなかった盲点でもあった．

授業実施者としては，初回の遠隔授業はこのように実体験してみないとわからなかったシステムの操作性や問題を，身を持って知る機会であったと受け止めている．授業回数を重ね，システムに慣れてきた授業の中盤では，遠隔授業の実施上，授業実施者の思いつきや工夫を拘束する規則がないことから，授業実施者が受信側の教室を訪問する，信大生を本学に呼ぶなどのアイディアを自由に試みることができたのも，初の遠隔授業ならでは，の挑戦であった．

全 15 回の本授業すべてを終えて，ようやく授業実施者も履修生も遠隔授業システムそのものに慣れて，改善点を思いついたり，その意義を感じて楽しめるようになったと思われる．つまり遠隔授業実施初年度の 2010 年度は，授業実施者も履修生も遠隔授業システムそのものに慣れ，試行錯誤する「導入」の機会であった．

今後は，遠隔授業の通信システムの安定化に期待を寄せる一方で，授業実施者自身が授業で用いられるシステムに慣れてそれらをスムーズに運用できるように努め，少しでも履修生が抵抗を感じずに学べる条件を整備する必要がある．

4.3　キャンパス間で異なる時間割や学年歴への対応

本授業を開講し，他大学の履修条件を調べてみたところ，受信側の履修生には自分の大学で自分が履修すべき必修の授業が入っていないこと，つまり「履修したい科目が常に履修できる時間に設定されている」という時間割が組まれていないと，いくら遠隔授業を配信しても意味がない．

本授業では，授業が開講されて間もなく時間割の振り替え制度によって，信大の履修生がリアルタイムで履修できないことがあった．つまり，本授業の場合は遠隔授業の醍醐味ともいえるキャンパスを超えた意見交換が出来ないことは，異なった立場の考えを聞いて視野を広げつつ自分の考えを明確にするという本授業の学習目標の到達程度にも影響を及ぼす．そのため，履修希望者が履修できるための大学間の時間割調整は，遠隔授業を実施する際の大前提である．特に本授業のような専門科目の場合は，関連する学問系の大学や学部間での個別の時間割調整が必須である．

4.4　効果的なゼミを展開する授業運営能力

履修生は意見交換や海外の看護などの実際場面の写真

や動画への関心が高く，それらが「本授業に期待したこと」が「満たされている」と回答した主な理由となっていた．そのため，本授業では今後もキャンパスを超えた意見交換や，リアルな体験談，画像・映像を取り入れることが履修生の期待に応える授業となりうると考えられた．特に学科や学年が異なる履修生との意見交換は，双方の履修生にとって「視野が広がる」という，従来の学内だけでの授業では決して得られなかった独特の効果である．本授業では，信大の履修生が述べる意見の質と，彼らの授業参加に対するモチベーションが高く，それらが履修生同士を知的に刺激し，結びつけたと考えられた．その結果，履修生にもたらされた「視野の広がり」は，「看護の実践と統合」という新分野が看護基礎教育カリキュラムに設置された際の「国際的な広い視野に基づき，看護師として諸外国との協力ができるような看護師を養成する」というねらいや，「世界の幅広い対象や事象への理解」という本授業の学習目標に合致する偉大な成果であると考えられた．

一方，意見交換に対する自由記述で認められた意見は，テーマの提示や時間設定，進行，意見のとりまとめなどの授業実施者の授業運営方法の拙さについての指摘であった．本授業は，90 分間という限られた時間内に，精選された知識の提供と，具体的な事例に基づいて思考や判断力を養うという学習目標に即した授業運営が不可欠であった．そのため，特に意見交換は予定通り収束し，かつ履修生が充足感をもてるよう綿密に計画されるべきであった．

つまり，本授業をゼミ形式で効果的に行うためには，授業実施者には確実な授業運営能力が求められる．さらにこの意見交換を効果的に行うには，前述した履修生の確保とあわせて，学習目標を達成するために望ましい履修生数についても検討しておく必要がある．

4.5　遠隔授業を進める上で配慮すべき事項

遠隔授業では，配信側と受信側の履修生が同じ条件で履修が出来るよう，双方に不利益の生じない配慮が不可欠である．本授業では授業用の資料を準備する上で，eChes 上にアップ出来ない資料媒体（参考資料としての学報や各種パンフレット，観察結果を書き込んだフィールド・ノートなど）は前日までに実物を履修生の数分揃えて，受信側の大学事務担当者に配送する必要があった．一方，eChes 上に事前に PDF などで資料をアップした際は，授業実施者の都合によってそのタイミングが常に遅れ，授業前日にようやくアップするのが常であった，授業用の資料の配布は，受信側と配信側の大学の履修条件を等しく保つための一つの重要な要件と考えられる．そのため今後は，履修生がシステムに慣れてきたら，学内外に関わらず双方の履修生各自が資料を印刷して持ち寄ることを原則としたいと考える．このとき授業実施者は，当然，履修生が eChes から資料を印刷できる期限を考えたタイミングで eChes 上にアップするという原則を厳守する必要がある．

また，本授業で授業実施者が信大の受信側教室を訪問したのは，中盤の筆記試験監督を兼ねて履修生に実物の教材や資料の提示，教材の試飲（開発途上国の乳幼児の下痢症対策として用いられる保健飲料）などを促すためであった．履修生に直接会って聞くべき意見があったり，提示すべき教材の種類によっては，このように受信側教室を直接訪れるといった発想や手間が必要と考えた．

さらに，本授業では信大の履修生が大学の都合によりリアルタイムで履修できなかった際に，授業録画ビデオの視聴を促した．この画ビデオは，履修登録した学生であれば授業後，パソコンでいつでもどこでも視聴が可能な状況にある．しかし，今後はこのようなビデオ履修の利便性ゆえに，授業の補完や復習という目的以外に活用される可能性も想定しておく必要がある．このたび開講前に他大学より授業実施者に対して，前年までに「国際看護学」の単位取得ができなかった学生への単位補完手段としてのビデオ履修について要請があったが，今年度は遠隔授業の初回にあたり，その可能性について想定した授業が実施できず要請に応えることができなかった．そのため今後は，授業録画ビデオの活用の可能性や原則を明確にした上で，それらに応え得る授業を準備したい．

5. まとめ

遠隔授業「国際看護学」の究極の目標は，国際保健医療に関する知識・方法に加え，幅広い視野で対象をとらえ，国際看護を実践するための基本的な力をつけることであった．2010 年度にゼミ形式で行った遠隔授業「国際看護学」は，本授業がめざしてきたこれらの学習目標を効果的に果たす一方，ゼミの進行やとりまとめなどの意見交換に関する授業運営能力は，授業実施者自身が改善に取り組むべき課題であった．つまりゼミ形式での遠隔授業をより効果的に行うためには，授業実施者が自分自身の授業運営能力の向上（FD : Faculty Development）と遠隔授業システムの運用に対する熟練に努める必要がある．

6. さいごに

モニター画面で知り合った履修生同士の中には，授業開講期間内に開催された課外活動で偶然で出会ったという感動を体験した履修生がいた．また，信大の履修生は授業実施者が受信側教室を訪問するなどの予期せぬ出来事を体験した．また，授業の最終日には，信大の履修生が本学を実際に訪れ本学の履修生と実際に出会い，意見交換するというサプライズ企画も行った．配信側と受信側の不利益を解消するために，思い付きのように試みた双方の大学訪問であったが，履修生の表情はモニターを通してしか知りえなかった授業実施者や履修生同士のリアルな出会いへの驚きと感動で満ちていた．

このように遠隔授業を通して芽生えた他大学への関心や，他大学の履修生への親近感・仲間意識は，履修生同士をつなぎ，彼らの世界と視野を広げる遠隔授業の副次的な効果として今後も大いに期待できる．そして，それは同時に国や地域，文化を越えた人と人の営みを支える国際看護の究極の目標でもある．

初めて挑戦した遠隔授業は，授業実施者が緊張も課題も感じる機会となったが，キャンパスを越え，人と人がつながることを強く実感できるすばらしい体験となった．

本授業のアンケート記入にご理解・ご協力下さった履修生の皆さん，遠隔授業の円滑な進行や操作にいつもご尽力いただいた学内外の皆様，そして何よりも当方に遠隔授業実施の機会を提供下さった「高等教育コンソーシアム信州」に心より感謝申し上げる．

本稿では，2011 年 1 月 22 日（土）開催の第 3 回 FD フォーラムで報告した結果に，後日提出された最終評価アンケート結果２名分の自由記述をデータとして追加した．

「たてなおしの英語」

—遠隔授業システムが作る新しい英文法リメディアル教育—

田村　亮子

清泉女学院大学人間学部

＜あらまし＞　『たてなおしの英語』は清泉女学院大学で開いている「英語基礎Ⅰ」「英語基礎Ⅱ」という２つの科目の通称である．今年度，これらの科目を高等教育コンソーシアム信州の遠隔授業の一環として開講した．

コンソーシアム信州で展開する授業の多くは，リアルタイムでの授業参加（配信側と遠隔講義受信側が同時授業）を主としているが，『たてなおしの英語』は，eChes を様々な方法で利用することによって，同時授業外にどのような多角的授業が可能になるかのひとつの試みとなってきつつあるように思われる．本稿では，この種の授業の必要性，内容と形態の特徴等について，今年度の反省点を基に，新年度に向けて改善したものを説明する．

＜キーワード＞　遠隔講義，英文法，リメディアル教育

1.　『たてなおしの英語』がめざすこと

1.1　英語教育と英語のレベルの問題

グローバル化が進む今日の社会において，一定のレベルの外国語，特に英語の運用能力の必要性は急速にその度合いを高めている．　では，その「一定のレベル」とはどのようなレベルを指しているのだろうか．

TOEIC は受験者に対して「*English Proficiency Scale*」という表（表１）を提示しているが，この表によれば，職業の種類等の差はあるにせよ，仕事上英語を必要とする会社が新入社員に要求するレベルは，C 以上のレベルである．

このような社会の要求に対して，現在の日本の大学生の英語の実力は二極化の傾向が強まってきている．一方の極に属する学生たちは，大学入学の時点で優に B レベルに達しており，大学在学中から英語の実力を発揮する機会に対して積極的に対応することが可能となっている．しかし，もう一方の極に属する学生達は，C レベル以上の英語の実力を身に着けたいという希望は持ちながら，D から C レベルに移行する「C ライン（英語検定では，およそ「２級」合格のレベル）」を超えることができないまま大学を卒業し，その結果，職場と社会一般において英語が必要とされる状況に直面するたびに当惑を繰り返している．

E，D レベルと C 以上のレベルを分けるのは，精密な文法の理解と，その上に組み立てられた英語文献の読解と作文力という基礎力の有無である．この文法理解の基礎がなくしては，どれほどの時間とエネルギーを費やそうと，C ラインを超えることはかなり困難である．

今日，多くの大学で，「リメディアル教育」が行われるようになってきた．「リメディアル教育」とは，各種研究領域において，本来大学入学以前に習得していることが履修の前提として期待されている実力レベルに達していないまま大学へ入学し，その前提条件を満たしていないために，それらの領域の大学での授業の履修に問題を生じている学生対象に，その前提を満たすために行われる教育であり，英語のリメディアル教育もこれまでになく多種多様に展開している．

しかし，リメディアル教育としての英語教育においていまだ開発が不十分であると感じられるのが，先に述べた C ラインを超えるための文法理解のリメディアル教育である．では，どのような意味で不十分なのだろうか．

1.2　大学側の英文法のリメディアル教育の問題点

1.2.1　新入生の文法理解に関する大学側の想定と現実の食い違い

新入生の英語力について，「英文法理解は身に着けてきているはず」という想定を崩すことを躊躇してきた大学は少なくないであろう．「いくら英語ができないといっても，be 動詞と一般動詞の区別くらいはつくだろう．　大学でそこまで指導することは必要ないのではないか」というような発言にあらわされるように，中学１年の英語

表１　TOEIC PROFICIENCY SCALE

レベル	点数	評価（ガイドライン）
A	860-	**Non-Native として十分なコミュニケーションができる.** 自己の経験の範囲内では，専門外の分野の話題に対して充分な理解とふさわしい表現ができる． Native Speaker の域には一歩隔たりがあるとはいえ，語彙・文法・構文のいずれも正確に把握し，流暢に駆使する力を持っている.
B	730-	**どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている.** 通常会話は完全に理解でき，応答も速い． 話題が特定分野にわたっても，対応できる力を持っている． 業務上も大きな支障はない. 正確さと流暢さに個人差があり，文法・構文上の誤りが見受けられる場合もあるが，意思疎通を妨げるほどではない.
C	470-	**日常生活のニーズを充足し，限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる.** 通常会話であれば，要点を理解し，応答にも支障はない． 複雑な場面における的確な対応や意思疎通になると，巧拙の差が見られる. 基本的な文法・構文は身についており，表現力の不足はあっても，ともかく自己の意思を伝える語彙を備えている.
C-ライン		
D	220-	**通常会話で最低限のコミュニケーションができる.** ゆっくり話してもらうか，繰り返しや言い返しをしてもらえば，簡単な会話は理解できる. 身近な話題であれば応答も可能である． 語彙・文法・構文ともに別な配慮をしてくれる場合には，意思疎通をはかることができる.
E		**コミュニケーションができるまでに至っていない.** 単純な会話をゆっくり話してもらっても，部分的にしか理解できない． 断片的に単語をならべる程度で，実質的な意思疎通の役には立たない.

学習のスタートラインにまで戻っての文法指導のし直しを，大学という高等教育の場において行う必要性を認めることは簡単ではなかったのである.

そのため，この「英文法が理解できていないはずはない」という想定を崩していない大学では，学生の英語力の低下を危惧し，英語のリメディアル授業を設けてはいても，それらの科目は，英文法理解の基礎は「すでに身に着けている」ことを前提としているために，remedial 科目と称しながら，実際には現状を remedy しないままで終わるケースが少なくないと考えられるのである.

あるいは，英文法の授業があったとしても，英文科等における高等英文法など，内容が高度な場合には，初歩的なレベルで文法を理解していない学生にとっては参加が困難である.

1.2.2　授業時間の制約

初歩からの文法学習のやり直しの必要性を認め，そのための科目を設けた場合，足かせとなるのが，時間的な制約である. 大学の一科目に与えられている授業時間は，１回 90 分―15 回が通常である．これらの限られた時間内で，文法理解を中学１年の初歩の初歩から立て直すことは指導者にとっても学習者にとってもかなり困難なことである．したがって，この時間的制約の問題が解決されない限り，文法理解は，再び中途半端な状態で終了せざるをえない場合が出てくることになる.

1.2.3　スケジュールの重なりによる履修の難しさ

さらに，これは，英語の授業の問題に限ったことではないが，英文法の授業があったとしても，スケジュールの都合上，他の履修必要科目と重なっているため，履修を希望している学生のすべてが履修できるとは限らない場合は多い． 特に，この授業のように，週２回の授業となると，リアルタイムで受講することができる学生の数は，ごく限られてきてしまうのが現実である.

1.2.4　再受講の不可

科目によっては，１度の受講で，授業内容が十分に理解可能な科目は少なくない. しかし, 英文法に関しては，１度の説明で受講者が内容を十分に理解することを期待することは困難である．もちろん，受講者が中学，高校での学習ですでにいったん文法を理解していた場合は，彼らに必要となってくるのは復習（つまり，以前の理解を思い出すこと）であるから，１度の授業受講でも十分でありうる．しかし，まったく未習得の文法項目が多々ある場合，それらを理解するには，１度だけの説明はあまりに不十分であると言わざるをえない.

1.3　英文法の自習のむずかしさ

1.3.1　メタ認知と英文法

英文法を学習しなおすためには，大学に頼らずとも，自学自習すればよいのではないかという考え方もありうる．文法の再学習のための参考書の出版数が増加傾向にある事実は，今の日本に，「C レベル以上の英語力をつけるためには，やはり文法理解の基礎力が不可欠である」という共通理解が次第に広まってきていることを示している．参考書が潤沢に出回っているのであれば，それらの参考書を使用して自習すれば十分ではないかと考えたくなるが，E，D レベルにある学生達が抱える問題のひとつは，彼らが，自分の英語力に関してのメタ認知がで

きないことである．

メタ認知とは，「学習」に関していえば，学習するべき目標の全体像のどこに自分は位置しているのか(つまり，どこまで，何をすでに学び，今後何をどれくらい学ぶ必要があるのか)，どの部分についての理解が不十分で，それらの不十分な理解をどうすれば十分な理解に変えることができるのか，などという，勉強の全体像とその学習の道筋と自分の立ち位置との関係を理解することである．学習に関してメタ認知ができないと，「自分が何をわかっていないかがわからない」という状態に陥ってしまう．したがって，自分の英語の実力に関してメタ認知ができていない状態にある学生たちに，参考書を使用しての文法の自学自習を求めることは，迷子になっている人間に，自力で迷子の状態から脱出せよと要求するに等しいと言える．結果として，それができる学生の数はかなり限られてきてしまうのである．

結果として，自分の英語の実力についてメタ認知ができていない学生が英文法等の基礎のたてなおしを自習によって達成することは困難であり，なんらかの形での指導者が欠かせないものとなってくる．

1.3.2　文章による理解の困難

大学教育を受けるために学生たちに要求される重要前提の１つが，文章の読解力――文章を読解することによって，その文章が伝えようとする内容を理解する力――である．しかし，今日，読解力が低い学生が増加しているのが現状である．英文法の参考書も，読者に十分な読解力があることが前提となっているものがほとんどであるため，読解力が低い場合，自力でその参考書の内容を理解することは簡単なことではない．

読解力が低い人々の理解を援助するために，聴覚，視覚からの助け，つまり，図や，音声解説，アニメーションなどを盛り込んだ解説本（例えば，「絵で分かる～」「漫画で読む～」「DVD で見る～」といった解説本）などが増えてきているが，英文法理解については，そのような理解補助の仕組みを盛り込んだものはまだ多いとは言えないのが実情である．

2.　eChes を使用した「たてなおしの英語」の特徴

このような状況の中で，『たてなおしの英語』は，以上に述べたような，リメディアル教育としての英文法教育の問題を解決すべく，「英語基礎Ⅰ」「英語基礎Ⅱ」の２つの授業をあわせて，週に２回，15 週，合計 30 回の授業を行い，中学１年のレベルから初めて，重要英文法事項のほとんどを網羅し，C レベルでの文献講読・作文を

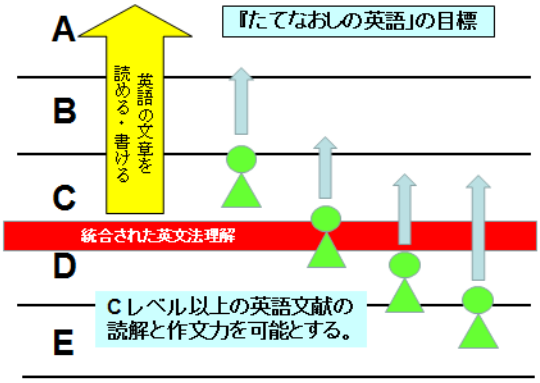


図１　『たてなおしの英語』の目標

可能にすることを目指してきたが，コンソーシアム信州の遠隔授業に参加することで，以下のような授業形態が可能となり，問題解決へのより良い道筋が見え始めたところである．

2.1　授業の遠隔配信

清泉女学院大学で行う授業を遠隔配信することで，県内他大学で同時受講することができる．

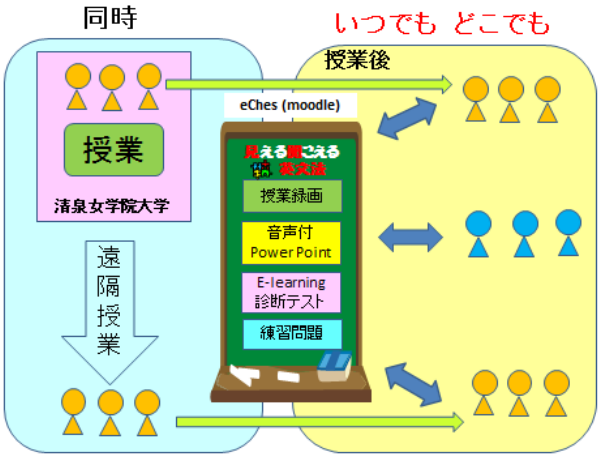


図２　eChes による「いつでも，どこでも」学習

2.2　授業録画

遠隔配信された授業は，録画され，当授業時間外に eChes で視聴することができる．これによって，スケジュール的にリアルタイムでの授業参加が不可能な受講希望者が授業に参加すること，また，リアルタイムで授業に参加したものの，授業内容理解が不十分であった受講

者が，授業を何度でも見返すことによって，理解を深めることができるようになった．

2.3　音声解説付き Power Point

授業では講義内容をできる限り図式化，映像化した Power Point を使用している．文章を読んで理解することが苦手な学生にとって，アニメーション付の図式と説明は，「見える，聞こえる英文法」として，理解の大きな助けとなることがわかってきている．

授業終了後は，授業で使用した Power Point を項目ごとに細分化し，簡単な音声解説を加えたものを eChes に掲示している．授業録画は，その一部だけを繰り返し見たいと思っても，授業全体から必要な部分を探し出すことはあまり簡単ではない．しかし，項目ごとに細分化した音声付 Power Point は，必要な部分だけを取り出して，繰り返し視聴することが可能である．

また，授業は時間が限られているため，解説予定箇所を時間の関係で割愛せざるを得ない場合が少なくない．その点，音声付 Power Point を使用することによって，授業中取り扱うことができなかった部分について，受講者に「授業で取り扱わなかった〇〇については，音声付 Power Point を視聴」するよう指示することによって，理解の不足を補うことができる．

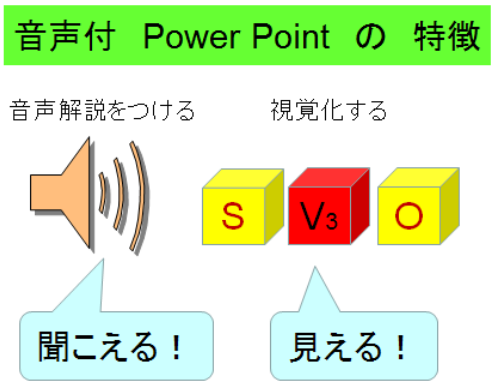


図３　「見える，聞こえる参考書」としての音声付 Power Point

「授業録画」と「音声付 Power Point」は，今後，学生の理解のレベルに合わせて，使い分けることができれば望ましい．つまり，理解の不十分な個所が多く，詳しい解説を聞きたい場合には「授業録画」を，部分的に理解が不十分な部分を抱えているが，授業のすべてを聞く必要のない学生は，解説必要個所について，従来の文法解説書を参照したと同じように，『見える，聞こえる参考書』としての「音声付 Power Point」を使用する，という

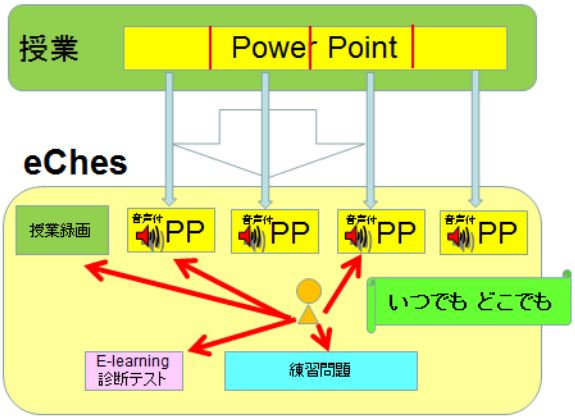


図４　「授業録画」と「音声付 Power Point」の違い

うように，使い分けをすることによって，必要な理解をエネルギーと時間の無理や無駄なく進めることが可能となると考えられるからである．

2.4　練習問題

授業を通じて理解した内容を，紙ベースの練習問題で定着させ，eChes 上に掲載される解答と照らし合わせて，理解のチェックを行う．

2.5　e-Learning 確認テスト

将来的には，授業内容の理解度を的確に診断することによって，学生自身の英語の実力についてのメタ認知を可能にし，単語の増強プロセスを援助するために，e-Learning システムによる学力判定を加えることを検討中である．

英文法についての理解を「車の構造」に例えると，「ガソリン」に相当するのが語彙力である．いくら構造がしっかり組み立てられていても，ガソリンが入っていなければ走ることはできない．同じように，英語の基礎学力の不足の中には，英語という言語の仕組みに対する理解の不足以上に，語彙数の不足が，仕組みの理解の過程での，そして，英語の実力全体を高める上での大きな足かせとなっているという問題が含まれている．

従来，語彙力不足は，学生自身が自分で工夫をして克服するべきものと考えられがちであったが，実力が不足している学生は，語彙増強のために必要な「継続した学習の積み重ね」を行うことがそもそも苦手である．

この点，e-Learning による単語理解と文法理解のチェックシステムは，学習の pace-maker として，学生の学習習慣の確立を助ける新たな一歩となるのではないかと考えている．

3.　「たてなおしの英語」をどのように活用することができるのか？

eChes を使用した『たてなおしの英語』は，単にこの授業に同時間帯に参加するだけではなく，この授業を他の授業に様々な方法で活用することが可能である．

例えば，他の英語の授業で，一部の受講生が，いくつかの英文法項目についての理解度が低いために，その授業の履修に困難を感じていると分かった場合，授業担当者は，「あなたは，○○についての理解が不十分であるので，その項目について，来週までに，『たてなおしの英語』を視聴し，復習をしてきなさい」と指示を与えることができる．

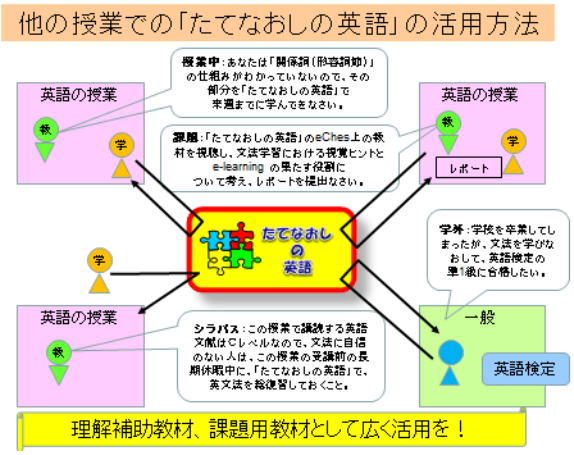


図５　『たてなおしの英語』の活用方法

あるいは，英語教員免許取得に向けた授業において，『たてなおしの英語』で使用されている授業教材について研究し，レポートを書くように指示することも可能である．

または，英文法の十分な理解に基づく読解力を前提としている授業は，シラバスにおいて，「この授業で講読する英語文献は C レベルなので，文法理解に自信のない人は，受講予定の前の長期休暇中に，『たてなおしの英語』を受講し，英文法を総復習しておくこと」などと履修の前提条件として指定することができる．

さらに，教育機関を卒業し，自習の他には英文法の学習の機会や方法がない社会人が，新たに文法を学ぶルートとして活用することもできるようになった．

これまでは，大学に在学しない方々で『たてなおしの英語』の受講を希望される方に対しては，授業時間中に授業の場所に赴いていただく以外に参加の方法がなかった．しかし，コンソーシアム信州のホームページから『たてなおしの英語』に簡単にアクセスできるようになって，昼間は仕事のため授業に参加できないお勤めの方，不登校のため体系的な授業を受けることができなかった中学生，中学・高校や塾などで英文法を教える方々で「たてなおしの英語」の教え方を参考にしたいと希望される方々からの受講希望の問い合わせが増加してきている．

この意味で，『たてなおしの英語』が，今後，コンソーシアム加盟大学の学生だけでなく，英語の基礎を勉強したいと希望しながら，その方法が限られている方々のために，これまでになかった形での学習の可能性が広がっていくきっかけの一つとなれば幸いである．

4.　おわりに

清泉女学院大学において『たてなおしの英語』を開講し始めてから８年になる．年を追うにつれて，清泉の在学生の受講希望者だけでなく，学外者の受講希望者も増加し，より多様な学習者に，よりわかりやすい授業を行う方法を考え，取り入れる必要に迫られるようになった．

たとえば，Power Point のわかりやすさを工夫したり，講義を１回聞いただけでは理解が困難な学生，仕事の都合で，出席がかなわない学外者のために，授業の録画を DVD 化し，貸し出しを可能にしたりした．しかし，それらの工夫にも問題点や限界があり，少なからざる困難が生じていた．そんな折，コンソーシアム信州において遠隔授業としてこの授業を開講できることとなり，それらの困難の克服が可能になってきたのである．

以上に述べた授業形態は，昨年４月，遠隔授業を開始した時点では十分に想定してはいなかったものである．しかし，eChes を使用して授業を進める過程で，それまで見えていなかった新しい形の授業の可能性と，これまでは考えつかなかった形での受講生への学習援助の方法が見えてくるようになった．その可能性を生み出したのは，コンソーシアム信州によって築かれてきた新しい協力の輪である．この協力の輪が，今後次々と，これまでになかった大学教育の姿を提案していくことになることを期待しつつ，遠隔講義システムを使用して，さらに発展した形でよりわかりやすい授業を展開しようと考えている．

コンソ配信授業『新聞と私たちの社会』の報告

加藤　鉱三

信州大学全学教育機構

＜あらまし＞　遠隔配信授業では遠隔配信授業に固有な留意すべき点があることは間違いない．しかし，その本質的な部分は，実は遠隔形式とそうでない通常の形式の授業の両者に必要とされる配慮である．本稿では，筆者が 2010 年度に行った授業で何をどのようにやり，どのような点に配慮したかを示しつつ，その配慮が実は遠隔授業以外の一般的な授業においても必要な配慮であり，だから遠隔授業が特別な配慮工夫を必ずしも要求するものではない，ということを示す．

＜キーワード＞　ネットワーク配信授業，演習タイプ，授業で必要な配慮

1.　授業について

この授業は，信濃毎日新聞社の好意により，新聞社から来てくださる講演者が，主に新聞と社会に関する様々なお話をしてくださる，というもので，今年度が２年目であった．昨年度は毎回講演があり，受講生も多数であったが，ただ学生の側に毎回の講演を聞くということについて強い必要性がなかったため，せっかくの講演でありながら，その講演内容が受講生に理解されているという手ごたえを特に強く感じることはなかった．この問題は，受講生の側に，

⑴　講演を聞く必要を与える
⑵　講演を理解するための素地を講演の前に作っておく

ということで対処可能である．そういう考え方の下に，今年度はまず⑵の対策として，偶数回を講演の日とし，その前回となる奇数回は，予めいただいている講演のレジュメをもとに，講演内容の背景とロジックを理解するための素地をグループワークによって作っていく，という作業を授業で行った．⑶が 15 回の授業の内容である．

⑶　15 回の内容

１．新聞の読み方（導入）
２．次回のためのグループワーク
３．新聞の特徴と社会的役割
４．次回のためのグループワーク
５．記事をつくる
６．次回のためのグループワーク
７．写真は何を伝えるか
８．次回のためのグループワーク
９．新聞をつくる
10. 次回のためのグループワーク
11. 新聞は生活をどう伝えてきたか
12. 次回のためのグループワーク
13. スポーツ報道に写る時代性
14. 次回のためのグループワーク
15. 民主主義を支える新聞

その上で，講演を聞いた後でのレポート作成を課した．レポートは，前もって⑷のような課題を提示しておくことで，⑴の対策，つまり講演の内容を聞き取るための必要を生じせしめるという役割を持っている（もちろん論理と背景を正しく読み取り正しく伝える，というものがレポート作成の主目的ではあるが）．

⑷　レポート課題の例

「くらし面」において，新聞を作る側は，次の４点について，伝え方という点でそれぞれどのような工夫をしていますか．

・生活者の目線、わかりやすさ
・くらしに役立つ情報
・社会事象との連動
・読者との双方向性

「くらし面」の使命・機能から説明しなさい．

この課題は，次の採点基準を指針として，２段落構成で 500 字以上 700 字以内で書きなさい．なお，この課題はあなたの意見を求めているのではなく，どのような講演内容であったのか，を問うていることに注意しなさい．また，各段落の内容の完成度はもとより，レポート全体としての論の運びや一貫性を意識して書きなさい．

(5) 段落ごとの採点基準の例

■第１段落（２点）

２点　①「くらし面」の使命・機能が何であるのかが講演の内容に従って段落の冒頭で端的に説明されており，②それに続く部分でその主張（つまり，回答する者が「くらし面」の使命・機能であると考えるところのもの）を支える内容（つまりその主張の根拠となるもの）が講演に従って適切に説明されている．

１点　①，②のうち１つの要素が全うされている

０点　①，②のうち１つも全うされていない

この課題は，(5)のように別紙で段落数と段落ごとの採点基準が与えられており，その採点基準が講演のロジックと背景を聞き取る助けともなるようデザインされている．もし採点基準のポイントを聞き逃したり，講演でそのような部分への言及がなかった場合には，受講生は講演者に質問する動機が与えられていることになる．実際にそのようなことは頻繁に起こり，この種の授業にしては，よく質問があったと言えよう．

この授業の規模は次のとおりである．

(6) 授業の規模

キャンパス数：　４　（メイン会場と３つの受信会場）

大学数：　３　（信州大学２キャンパスと他の２大学）

授業登録者数：　36 名＋２名＋２名＋６名

2.　遠隔授業で演習形式は可能か？

次にあげる演習形式の授業の特徴を演習形式の授業であるとしよう．

(7) 演習形式の授業のゆるい定義

・教員の講義部分がとても少ない

・授業は受講生のワーク中心

・学生に求められるのは「発言」と「考えること」

この授業では，奇数回の 50 分の講演を聞いている時以外は，学生はグループワークをしているか，そのワークの発表をしている．そのため，この授業は，(6)の定義に従えば，全くもって演習形式の授業であった．この授業はこの原稿執筆時には無事成績も出して終わっているため，「ネットワーク配信で複数会場を結ぶ授業であっても，演習形式の授業は可能である」と言って差し支えない．

この授業では，受講生はそれぞれのキャンパスでグループワークをする．グループワークで話し合ったことを発表する．この２点においては，ネットワークで複数キャンパスをつないでいる，という授業形態は，特に障害とはならなかった．ただし，発表は，受講生が自主的に発言する，という形ではなく，担当教員が司会者として各キャンパスの各グループから話を聞き出していく，という形を取った．キャンパス間をつないでいるのは基本的にはテレビ会議システムである．そこでは次のような障害がある．

(8) キャンパス間ネットワークの障害

・微妙なタイムラグがある

・個人として他キャンパスに話しかける，というよりは，キャンパスからキャンパスに話しかける，という構えになるため，どうしてもよそ行きモードになる

このような障害があるため，キャンパスＡの一人の学生が，キャンパスＢのグループに自由に話しかける，ということはとても考えにくい．そのため，グループ間のやり取りということはできなかった．しかし，上記のように，教員が司会者として各グループの話を引き出していく，という形を取る限り，キャンパス間ネットワークというインフラ上での授業である，ということは，特に障害とはならなかった．

3.　遠隔授業で注意すべきことは何か？

ここで，この授業の設計段階での動機を思い起こしていただきたい．昨年度のこの授業の問題は，

(9) いかにして受講生に講演を聞く必要を生じせしめるか？

であった．これは，逆に言うと，学生は放っておけば授業に集中しない，ということである．教員の話が授業の中心である時，そこでよほどの理由とよほどの工夫がなければ，話者の力量には関係なく，聴衆は集中しない．この授業で採用した(1)～(5)の形態は，この認識に立って設計したものである．そして，この認識は（もしそれが正しい認識であるならば），授業が通常のものであるか遠隔形式であるかは問わない．どちらの形式でも，同じように留意すべきポイントである．

さて，遠隔形式では，受講生の注意は通常の形式よりもさらにそれやすく，集中がより難しい．そのため，上記の留意点「学生は放っておけば授業に集中しない」は，遠隔形式の授業では通常の授業でよりもより強く留意しておく必要がある．

こういう事情があるため，講義ものでは，遠隔形式の授業では通常の形式の授業以上の配慮が必要である，ということになるだろう．

この授業で特に配慮した点を列挙しておこう．

(10)　この授業で特に配慮した点

- 受講生に参加する必要を与える
- そのため課題と採点基準を先に提示した
- 受講生はそれに対処しなければならないため，講演を一生懸命聞くし，グループワークに参加する動機も持つ
- その動機を維持するため，レポート課題を採点してフィードバックし，採点基準の通りに採点していることを受講生に理解させる

(10)から，次の２点が導かれるように思われる．

(11)　(10)の含意

1．遠隔形式の授業は，講義形式よりもむしろ演習形式の方が向いている
2．遠隔形式の授業では，確かに通常の授業よりも受講生を集中させる工夫がより必要ではあるが，しかしそこで必要な工夫（例えば(10)）は，**実は遠隔形式に固有のものではなく，本質的に通常の形式の授業においても同じように必要なもの**である

(11)の２．が本稿の最大のメッセージである．遠隔授業での配慮すべき点は，通常の授業時のそれと基本的には変わらない．それは，何らかの形で学生の授業への『参加』を維持する，ということであり，逆に，そこに十分な配慮があれば，遠隔形式の授業は特に難しいものでもない．もちろん，(8)にまとめたような，遠隔形式に固有な障害はある．しかし遠隔形式の授業には，

【その場所に行かなくても受講できる】

という，とてつもなく大きい（が，しばしば**余りに過小評価されている**）メリットがある．それは(8)を承知の上で克服するのに十分なメリットであると言えよう．

4.　遠隔授業で必要不可欠なもの

遠隔授業については，出席をどう取るのか，という質問をよく受ける．この授業に関しては，他会場での参加者の数が多くなかったため，他会場に関しては出席を取るまでもなく，画面を見てすぐに出欠を確認できた．しかしより一般的に言って，遠隔授業では，出席確認よりも，配布物と提出物の管理の方がよほど重要であろう．

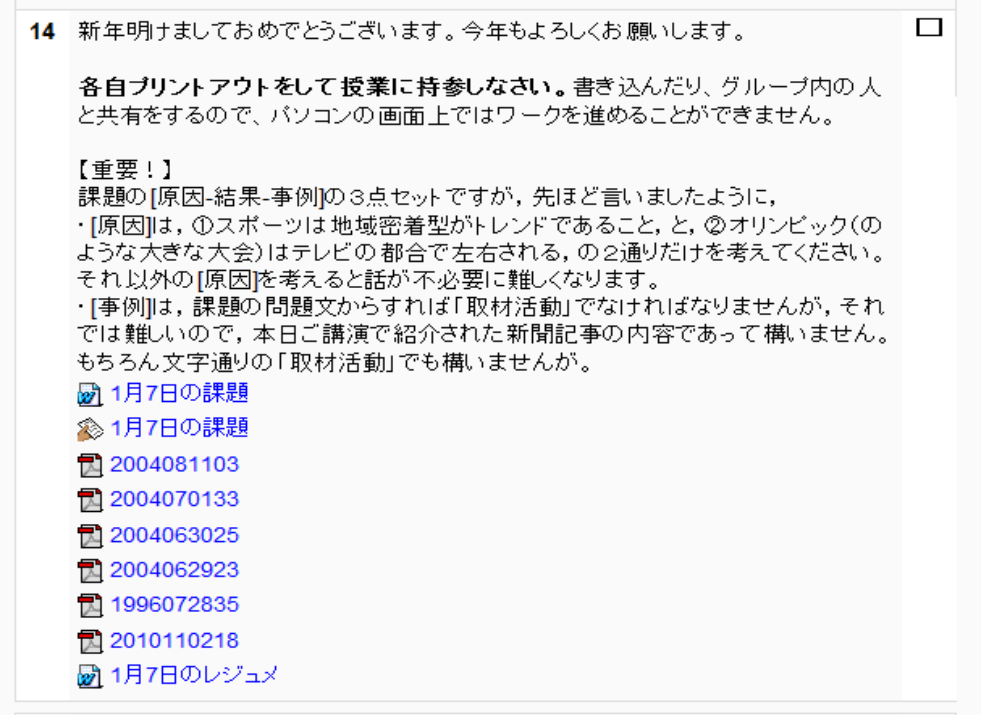
この授業では，配布物と提出物の管理には，eChes という Moodle ベースの学習管理システム(LMS)で対処した．逆に言うと，eChes を使わなければ，他キャンパスには資料を配布できず，また受講生が提出物を出すこともできず，更にその提出物をフィードバックさせることもできなかったであろう．もちろんファックス等を使うということも不可能ではないが，それには多くの人の手を煩わせることになるし，また事故の元でもある．

この授業では，LMS である eChes に予め資料をアップしておき，受講生は，メイン会場であるか遠隔会場であるかに関係なく，授業時には必ず自分で印刷して持参することを求めた．つまり，この授業では，メイン会場においてさえも，基本的には授業時に資料を配布するということはしなかった．その代わり，必要なものは全て事前に eChes にアップしておく必要があり，学生もそれをダウンロードし持参する，というやり方を取った．混乱があったのはごくはじめのうちだけで，受講生はそれにすぐに慣れたようである．（しかし新聞社からの講演者にはなかなかそれがイメージできなかったようでもあった．）

受講生に求める課題と採点基準はもちろん，課題の書式も同様に eChes 上で学生がダウンロードすることとした．課題の書式は課題提出画面にもなるようにできており，学生はそれを使って提出する．教員はそれをダウンロードし，採点し添削した上で，eChes 上で受講生にフィードバックする．このように，この授業は eChes なしには考えられないものであった．この場を借りて，eChes のメンテナンスにあたってくれたスタッフに改め

てお礼を言いたい.　　フィードバックのサンプルを示す.

最後に eChes の実際の画面のサンプルと，受講生への

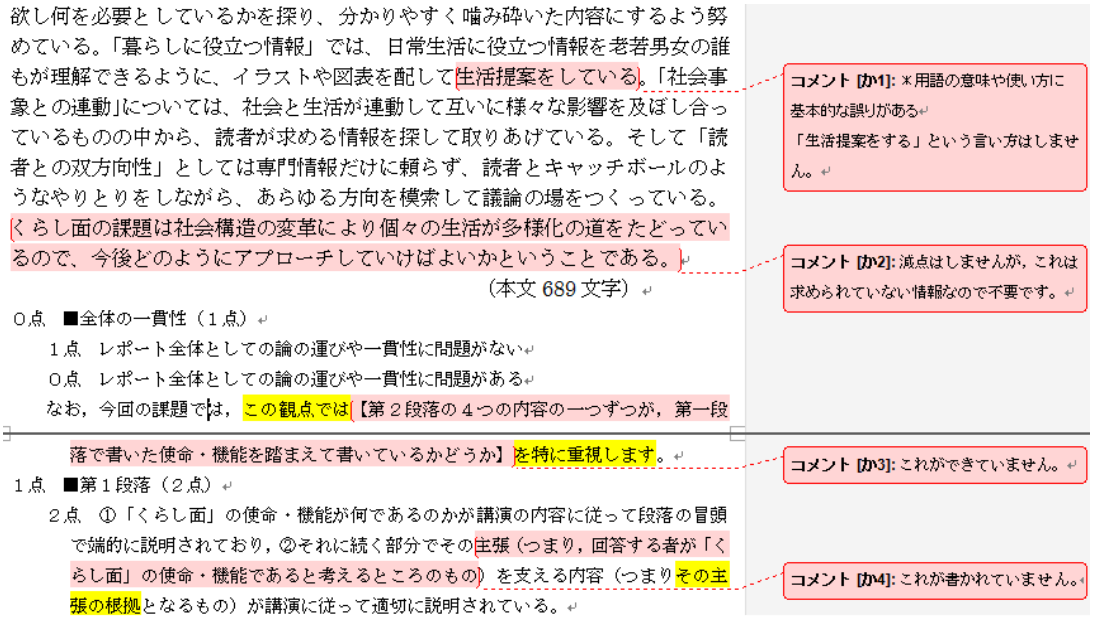


14　新年明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

各自プリントアウトをして授業に持参しなさい。書き込んだり、グループ内の人と共有をするので、パソコンの画面上ではワークを進めることができません。

【重要！】
課題の[原因-結果-事例]の３点セットですが，先ほど言いましたように，
・[原因]は，①スポーツは地域密着型がトレンドであること，と，②オリンピック(のような大きな大会)はテレビの都合で左右される，の２通りだけを考えてください。それ以外の[原因]を考えると話が不必要に難しくなります。
・[事例]は，課題の問題文からすれば「取材活動」でなければなりませんが，それでは難しいので，本日ご講演で紹介された新聞記事の内容であって構いません。もちろん文字通りの「取材活動」でも構いませんが。

1月7日の課題
1月7日の課題
2004081103
2004070133
2004063025
2004062923
1996072835
2010110218
1月7日のレジュメ



欲し何を必要としているかを探り、分かりやすく噛み砕いた内容にするよう努めている。「暮らしに役立つ情報」では、日常生活に役立つ情報を老若男女の誰もが理解できるように、イラストや図表を配して生活提案をしている。「社会事象との連動」については、社会と生活が連動して互いに様々な影響を及ぼし合っているものの中から、読者が求める情報を探して取りあげている。そして「読者との双方向性」としては専門情報だけに頼らず、読者とキャッチボールのようなやりとりをしながら、あらゆる方向を模索して議論の場をつくっている。くらし面の課題は社会構造の変革により個々の生活が多様化の道をたどっているので、今後どのようにアプローチしていけばよいかということである。

（本文 689 文字）

０点　■全体の一貫性（１点）
　１点　レポート全体としての論の運びや一貫性に問題がない
　０点　レポート全体としての論の運びや一貫性に問題がある
　なお，今回の課題では，この観点では【第２段落の４つの内容の一つずつが，第一段落で書いた使命・機能を踏まえて書いているかどうか】を特に重視します。

１点　■第１段落（２点）
　２点　①「くらし面」の使命・機能が何であるのかが講演の内容に従って段落の冒頭で端的に説明されており，②それに続く部分でその主張（つまり，回答する者が「くらし面」の使命・機能であると考えるところのもの）を支える内容（つまりその主張の根拠となるもの）が講演に従って適切に説明されている。

コメント [か1]: ＊用語の意味や使い方に基本的な誤りがある
「生活提案をする」という言い方はしません。

コメント [か2]: 減点はしませんが，これは求められていない情報なので不要です。

コメント [か3]: これができていません。

コメント [か4]: これが書かれていません。

大学連携における遠隔授業配信

ー　パネルディスカッション　ー

矢部　正之

信州大学全学教育機構

＜あらまし＞　第１部の報告を受け，その報告者をパネラーとし，参加者およびコーディネータを交えて議論されたあらましを，遠隔授業配信の技術的側面における課題と期待と，授業の実施方法による効果の違いに大別して報告する．技術的側面では，現在でも種々の課題があるものの，技術的工夫に加え授業実施の際の各担当教員の工夫で対応していることが示された．授業の実施方法について，第１部の報告では，遠隔授業のゼミ形式での効用に焦点が当てられたが，講義形式においても周到な準備等により，教育効果をあげることが可能であることが議論された．このようなプロセスは，対面授業での教育の質向上への波及も期待されるもので，遠隔授業配信の実施による効果として議論された．また，大学間連携による遠隔授業への学生の参加は，学生が様々な人に出会い，多様な学問に出会う機会を得られるという効果も期待されている．

＜キーワード＞　遠隔授業，技術的側面，講義形式，ゼミ形式，学生の出会い，教育の質

０．はじめに

第１部の報告を受けて，会場からの質疑応答を中心に，遠隔授業の配信およびそこで実施される教育の在り方や質の確保についてパネルディスカッションが実施された．パネラーは，第１部の報告者である信州大・加藤，清泉女学院大・田村，信州大・松岡，長野県看護大・宮越および高等教育コンソーシアム信州・森下（氏名の 50 音順）の５名で，本報告の報告者である信州大・矢部がコーディネータを務めた．

1.　ディスカッションのあらまし

質疑応答の詳細は付録に示し，それに関するパネラーと会場との議論を，技術的側面と授業実施の方法の２つの観点で以下にまとめる．論点の中心は，遠隔授業の実施方法そのものについてであった．技術的な問題から，遠隔授業に適した授業形態，遠隔授業の特徴など，多岐に及んだ．

1.1　遠隔授業の技術的側面について

技術的な問題では，授業の際にクリアな音声を得るためにヘッドセット型のマイクを利用する，といった工夫に始まり，カメラアングルなどのコンテンツ撮影方法などの議論，それに関連する授業方法の工夫について議論された（質疑応答の詳細は，付録９「教材・コンテンツの撮影・作成」等を参照）．

技術面では，コンソーシアムのシステムの雛型となった信州大の SUNS[1] と言うシステムでの実績・経験が多数活かされている．このシステムは，20 年以上前に導入され，改良を繰り返してきたものであるが，それでもまだまだ対面授業と同等と言うところまでは来ていない．より高画質，高音質であるものを取り入れて，臨場感を増すことが考えられる．さらに，等身大の教師をプロジェクターで映して授業を行うなどの工夫も考えられる．ただし，効果を上げるにはそれ相応のシステムが必要であり，費用対効果も今後の課題となると思われる．

現在のシステムについて，実際に使ってみての課題等を，パネラーから聞いた．

教育部会長の立場から加藤は，カメラの位置や撮り方について，非常に重要だと思うとのことで，宮越の発表にあるように，学生にどういう風に見えているか，を意識することは大事である．どう対応するかについては，システムにコストを掛けてやらなければならないところ

もあるが，金を使わずに工夫できる部分も沢山ある．カメラアングル一つとってもそうであるし，授業の中でどういう問い掛けが，サテライト教室の学生に有難いのか，あるいは効くのかそのような実施面での工夫も，ハード面と同じように非常に重要だし死命を決するところである，との指摘があった．

ドイツ語を担当する松岡からは，e-Learning 的に VOD を利用する授業にドイツ語の授業はしたくないという発言があった．目の前あるいは画面の向こうに居る学生とのコミュニケーション，双方向性があって初めて授業が成り立つものである．この双方向性，例えばドイツ語の授業で，ドイツの文化の話に脱線してその時に写真を見てみようかなどと言って資料を示して，それを提示した人間が目の前に居てその時の状況を話すと言うことが，学生にとっての異文化体験になるわけで，画面の向こうであってもリアルタイムの体験となることを大切にしたい．遠隔授業でも，そういうことを学生が感じられるポイントがあるので，とりあえず，今あるシステムをどれだけ使えるか考えてやっていきたい，との意見が述べられた．

またシステムを補い，遠隔授業でのコミュニケーションを深めるために，受信側（サテライト）に出向いて授業を実施することの効果が，松岡および宮越から指摘された．宮越によると，リアルなものが対象である国際看護学の授業で，途上国の下痢の子供に飲ませる ORS の体験に加え，「学生が喜ぶだろう」と言う目論見もあり，サテライトに出向いたとのことである．実際，サテライト側の学生は感激し，その時だけサテライトになった長野県看護大の学生も驚き，さらに遠隔で受ける側の気持ちも味わった．これにより，双方の理解もさらに深まり，最後の授業ではサテライトの学生が長野県看護大に来校し，交流が深まったとのことである．

さらに宮越からは，「看護はできてなんぼ」の技術教育的側面が大きく，遠隔講義そのものに関心が低いのだが，実際に担当してみると，この方法にも効果があり，特に途上国に配信して国際協力の部分で寄与できるのではないか，と期待しているとの発言があり，ハード面では，様々な看護技術をどのように画面で伝えるか，工夫が求められる，との指摘があった。

英語を担当する田村からは，このようなシステムを利用したコンソーシアムの取組そのものが，今までの学習では不可能だったことを，いくつもの点で可能にしているとの認識で，この取組をさらに進めてよりよい学習を実現したい，との期待が示された．

このように，技術的にはまだまだ工夫の余地もあるが，現状のシステムでも，教育方法や機器の利用方法の工夫で，効果的な教育が可能であることも確かであり，同様の取組を行っている教育機関やコンソーシアムとも連携してより効果的な教育を実現できることが期待される．

1.2　授業の実施方法について

1.1 の議論を受けて，授業の実施方法とその評価について，議論された．本コンソーシアムでは，統一的な授業評価のアンケートを実施しているものの，遠隔授業への親和性に関する調査が中心で，授業の効果そのものへの評価はまだである．そのため，パネラー個々の実感と参加者からの意見により議論が進行した（質疑応答の詳細は，付録５「講義形式とゼミ形式」等を参照）．

遠隔講義や e-Learning では，知識伝達型の授業の方が，容易でありかつ効果があると言われてきているが，第１部ではどちらかと言うとゼミ形式，小人数のコミュニケーションを密にする形式の授業に関する報告がメインであった．これらのついては，困難であると言うのが定説であるが，講義形式の方が難しいのではないかとの指摘もあった．

これについてパネラーから意見を聞いた．

加藤からは，報告の中で，講義形式の方が難しくゼミの方がやりやすいと述べたが，言い方を変えると，学生の授業参加を高めること，さらに授業の中で学生自身がやることがある，ことが重要であるとの発言があった．その意味で，講義形式であっても，ただ話すのではなく課題を考えさせる，それに関する確認テストを実施するなどの工夫で，効果を上げることが可能である，ことが指摘された．

ドイツ語で講義科目を担当している松岡からは，対面授業でありがちな欠点，例えば一方向性が強くなり，学生が手持無沙汰になってしまったりすることが，遠隔授業では拡大していくとの発言があった．その際，目の前の学生の反応に注意を深くすることが，遠隔の向こう側に居る学生にも配慮ができるようになる効果が期待できる．遠隔講義形式の中でも，ちょっと考えさせる時間を与えたり，送信する画面にホワイトボードを映し出して，そこに解答やコメントを手書きして共有するなどの工夫で効果を上げている．困難はあっても，それに対して一つ一つ解決していけるものが，ほとんどである，との指摘があった．

宮越からは，知識提供もあるが応用的な学問でもある

「国際看護」の授業で,応用的なことを膨らませるのに,講義中心の知識提供のところは抑え目にしたとの発言があった．人との相互のやり取り，自己を開示するといった機会を作るのは難しいが，他の学問分野の授業とも共通する部分もあり，遠隔授業でそれをどう実現するか,一緒に考えていきたいとの期待が述べられた.

実際，遠隔授業は対面授業以上に準備が重要で，事前の準備で授業のできが決まるものであり，担当者の実感として，遠隔授業を担当すること自体が，効果的な FD になることが，加藤から指摘された．上記のパネラーの実感は，これを示すものである.

田村からはこのようなコンソーシアムの取組について,今まで不可能だったことが色々可能になったこと，試行錯誤の段階だが，コンソーシアムでの連携の中で，これまでできなかったことができるようになり，もっとできるようになるのではないかとの期待が述べられた．遠隔授業のシステムに加え，コンソーシアムでの連携による教育改善への取組に期待するところは大きいのである.

1.3　受講学生のコメント

前項での田村のコメントにある「今までの学習では不可能だったことが可能に」との点から，実際に遠隔授業を受講した学生から次のようなコメントがあった.

【学生 A】　本日の報告を聞いて，授業担当者が，色々工夫して授業していることが良く分かって良かった．まず授業自体だが，今まで体験してきた学びの中にはない授業であった.「たてなおしの英語」は他に例のない授業だと思う．それが，一つの大学の学生だけではなく，長野の学生皆に，文法を基礎から学びたいが学ぶ場所がない人たちに開放されて，学べるようになっているのは幸せである.

【学生 B】　コンソーシアムのシステムで，授業の録画を後からみることができ，分からないところなどを確認できて良かった．またドイツ語の授業で，授業に先立って質問できると言うことを知り，今後このような工夫がどのように展開していくのか楽しみである.

【学生 C】　私は機械に弱いので，もう少し慣れてしっかり学べるようになりたい.

学生 A からは，授業担当者の教育改善に向けた努力への評価と期待が示されるとともに，コンソーシアムでの授業配信が，新たな学びを作り出すことを示された．学生 B からは，遠隔授業の実施にあたり，ICT の利用により実現した利便性への評価と，今後への更なる期待が示された．その中で，学生 C の実感は，今後遠隔授業の取組をより普及させるために,ヒントを与えるものである.

1.4　まとめに代えて

パネルディスカッションでは，質疑応答を中心に，その中から様々な問題点も炙り出されてきた．今後改良していかなければならない点も多々あり，これらについては，本コンソーシアムや同様の取組をされている多くのコンソーシアムで検討し行くことが求められる．その上で，前項の受講学生からのコメントは，このパネルディスカッションのポイントを突いたもので,「まとめ」の必要がないほど的確なものであった．このような期待と評価に応えるために，まとめに代えて，パネラーからのコンソーシアムでの遠隔授業配信に対する前向きな展望を以下に示す.

信州大の加藤から，教育を議論すると，授業の質の確保という視点が前面に出過ぎるきらいがあるが，遠隔授業は第一に，そこに赴かなくて良いというメリットがあることが重要であると指摘があった．このメリットを活かすには，遠隔授業の質だけではなく，数の確保も非常に重要なことである．カメラアングルや授業方法など,質の確保の工夫も大事であるが，それだけではなく，遠隔授業が容易にできて，より多くの方にやっていただけるようにすることも大事である．結局，遠隔授業も対面授業と同じで，デメリットが強調される程度で，気を付けることは同じであり，その中でより良い授業を実施していけば良い，といった気軽さの実現への期待が述べられた.

長野県看護大の宮越からは,大学の所在地が遠隔地(駒ヶ根市）であり，なかなか他の大学との出会いがないところで，こういうシステムを使って，出会いがないと言うグチが少しでも減ることへの期待が示された．学生の「出会いがあった」との言葉は，教師にとっても喜びである.

信州大の松岡からも，学生の可能性が拡がることへの期待が述べられた．ドイツ語の発音指導などの学習面でも，宮越から指摘のあったキャンパス間の出会いという面でも，より多様な体験ができることを期待したい．例えばリアルな交流として，合宿を入れるなどの工夫があっても良い．実際，信州大で実施しているドイツ語研修にこの遠隔授業の受講生の一人（佐久大）が同行することになった．遠隔授業で出会った，画面上でしか会った

ことのない学生同士が一緒にドイツに行く，というような機会の拡大に向けた期待が述べられた．

また技術的な側面でも，コンソーシアムの森下から，世界の学びたい人が，学びたい時に学べる環境の提供への期待が示された．

このように，遠隔授業の取組を質・量とも充実することで，学生がより多くの友や，より多様な学問に出会うきっかけとなることへの期待が大きい．

清泉女学院大の田村からは，コンソーシアムでの取組の多くの効用の中で，特筆に値するものとして，多くの学生に受講してもらえると同時に，授業録画や教材のWeb配信という形で，多くの先生方に見ていただく機会が得られると言うことが指摘された．色々な先生方に見ていただくことは，色々なご意見をいただき，その意見を活かして，新年度に新たな授業を実施できることに通じる．このような形で，より良い教育が拡がっていくことへの期待が示された．

本コンソーシアムにおける ICT を利用した授業配信システムの導入は，長野県が大変広いと言うことに起因している．このシステムを導入して，このバリアの一部を解消したわけであるが，そこから上述のような学生－学生，学生－教員，教員－教員間の様々な「交流」という副次的な効果も出てきた．遠隔授業の実施は困難も多いが，それを乗り越えることによって，より新しい教育の形，地域連携の形が見えてくることが期待できる．都市部以外の大学では特に，様々な「出会い」を含めたより広範な教育資源を得るのに，遠隔授業の活用は重要である．

今後，本コンソーシアムの中だけではなく，同様の取組をされているコンソーシアムとも連携し，例えば，このような取組の拡大に大きなネックとなっている著作権処理の問題への改善に向けたアプローチなど，これまで述べてきた技術的，教育実践的な面以外でも協力して取組み，連携の強みを活かしていくことが期待される．

付録：質疑応答の詳細

パネルディスカッションに寄せられた質問を，それに対する回答および意見と合わせて以下にまとめる．これには，当日回答できなかった質問に対してネット上で回答したものも含めてある．

付録１　授業評価について

【質問】　遠隔講義に関する授業評価は共通なものを作成し，実施しているのか？

【回答】　前期授業については７月，後期については現在（１月に）実施している．その際，共通の授業評価アンケートを実施しているが，「遠隔講義を受けてみてどうでしたか？」という内容のアンケートを実施しており，授業自体の評価は，行っていない．遠隔講義に関する受講生の印象が中心である．

付録２　履修の案内・周知の方法

【質問】　各大学への履修の案内，その周知方法はどうしているのか？

【回答】　事務的には，「受講の手引」を各大学の事務窓口で配布している．それを見て学生は，履修を検討する．これが第１の案内である．第２の案内がコンソーシアムの Web サイトに，ビデオシラバス（テキストのシラバスの他に授業担当者が作成）を置いて，授業の解説・宣伝を行っている．第３の案内方法として，お薦めの授業についてポスターを作成している．

コンソーシアムでの単位互換の取組では，特にまだ一般的ではない遠隔授業システムを利用する場合，受講生の確保は難しいものがある．そのため，本コンソーシアムでは，色々な施策をとっている．ビデオシラバスについては，信州大学の現代 GP[2] での取組で，通常の授業に対し作成し一定の効果があったもので，これをコンソーシアムでも継続して活用している．ただし，色々な案内・宣伝を実施してもなかなか効果が上がらないことも事実である．その中で，実績を上げている清泉女学院大学の取組の紹介があった．

その取組とは，単にポスターを作るだけではなく，そもそもこのコンソーシアムで単位互換授業を提供していること自体を，口コミでかなり繰り返し，幅広く知らしめた．さらに実際，学生たちが ICT を利用して，これらのシステムに触れられるまでもって行く講習をしたのが効果的であった．ポスターについても，かなり大きく掲示したので，これらの企画の存在についてはほとんどの学生が認識していたようである．

付録３　サテライトへの配慮について

【質問】　担当教員がサテライト校に出向くことが，効果的とのことで，将来的には重要な役割かと思うが，今後の展望はどうか？

【回答】　ドイツ語の授業で巡回を行っている松岡の場合は，実施されるものは補習であって授業時間の他に各大学を回っているものである．ただ，正規の授業の場合，開講大学の優先性をどれほど考慮すべきが疑義があった．このことについては，遠隔配信授業は，まさに「単位互換」の授業であり，各大学が開講している授業を，このシステム上で共有しているもので，コンソーシアム独自の開講授業ではないことが，問題になった．しかし，配信システムがなければ休講になっていた授業が，このシステムで実施できるのだから，十分説明がつくとの見解が出された．どちらにしても，受講生が承知できる説明がなされることが肝要である．

実際に配信授業で別サイトからの授業を実施した宮越は，事務局の確認を得て，リアルなものが対象である国際看護学の授業で，途上国の下痢の子供に飲ませるORSの味見をさせてみたかったことに加え，「学生が喜ぶだろう」と言う目論見で，サプライズを企画したとのことである．実際，学生は画面で見る教師が実際に現れてびっくりし感激した．同時に，通常では発信サイトである長野県看護大の学生も驚き，加えて遠隔で受ける側の気持ちも分かったようだった．これまで，遠隔側に配慮をしていることに疑義を抱いていた学生たちも，その配慮の意味が理解できて，双方の理解にもつながると言う効果もあった．最後には信州大学から学生が長野県看護大に来ることも実現し，大変効果的であった．

付録４　受講状況について

【質問】　「たてなおし英語」の受講者数は？

【回答】　配信元（清泉女学院大）と遠隔講義合わせて，約百人ほどである．そのうち，遠隔講義はおよそ 15 名で，４月からの登録だけではなく，途中でこういうシステムがあると言うことを知り受講した人もおり，それも含めている．

付録５　講義形式とゼミ形式

【質問】　このシステムでの授業の場合，ゼミ形式の方が効果的で，講義形式の方が難しいとのことであった．信州大学はキャンパスが離れており，１年次に単位を落とした学生が共通教育の科目を再履修するために，このようなシステムで開講するとの話がある．これらの対象科目は，講義科目であり，そのような学生はどちらかというとモチベーションが低いので，本日の話からは，ゼミ形式が効果的であり，対面授業より遠隔授業の方が受講生のやる気が必要とのことだが，再履修の講義科目は難しいのではないか？

【回答】　加藤の報告の中で，講義形式の方が難しく，ゼミの方がやりやすいと述べられたが，言い方を変えると，学生のインボルブメント，授業に参加することが大きいこと，さらに授業の中で学生自身がやることがある，というのが重要である，と言うことである．そうすると，講義形式であっても，ただ話すのではなくて，課題を考えさせたり，それに関する確認テストをしたりすれば，効果が得られるはずである．たしかに，グループワークは，講義では難しい．しかし，隣の席の人と課題について話し合ったり，一緒にやったりすることで，グループワークをすることは可能である．講義形式であっても，効果が得られるものである．

ドイツ語の講義科目を担当している松岡からは，対面授業でありがちな欠点，例えば一方向性が強くなり，学生が手持無沙汰になってしまったりすることが，遠隔授業では拡大していくと言うことが指摘された．そこでは，目の前の学生の反応に注意を深くすることが，遠隔の向こう側に居る学生にも配慮ができるようになる効果が期待できる．そのためには遠隔講義形式の中でも，ちょっと考えさせる時間を与え，４，５分でも考えさせて発表させる方法は可能である．また，遠隔サイトへの画面にホワイトボードを映し出して，そこに解答やコメントを書いたものを映して共有するなどして，効果をあげることも可能である．実際に遠隔講義に課題があっても，問題点が出てきたときに一つ一つ解決していけるものが，ほとんどである．

付録６　出欠について

【質問】　受講生の出欠の取り方はどうしているのか？

【回答】　「ドイツ語」の授業では，最初の内は名前を呼んでいたが，その後はeChes[3]で，その日の授業内容に沿った課題を提出させて，リアクションペーパーとして出欠を確認している．もうひとつの「環境文学」の方では，200 字程度の作文（授業を聞いてなければ解答できない内容のもの）を提出させることで対応している．「国際看護学」では，受講生が少ないので，目視で行っている．「新聞と私たち」は，サテライトの方は，見て分かる程度の人数であるので，「＊＊さん，居ますね？」で確認できる．多数の受講者のいる発信側は，受講票に学生自身が書き込んでいる．「たてなおしの英語」では，遠隔講義で使っているパワーポイントの中に，授業のどこかの場面がくると，そこにキーワード（国の名前など）

が示され，授業に出ていればそれを示せると言うシステムを取っている．

理想的には，各サイトにTA等を配置して，出席の確認，資料配布と課題回収をするのが良いのだが，コスト的になかなか難しく，資料配布・課題回収（提出）については，LMS で行い，出欠確認については，各担当者の工夫で行っている．直接の対応によるもの以外は，いわゆる「性善説」あるいは「学生の本分」によるしかないのだが，フォーラムの際用いた掲示板を運用しているC-Learning[4] の出席確認機能を利用して，キーワード（授業で提示）による出席確認をする方法などもある．

【質問】　ライブ講義に出席できなかった受講生は，後日授業録画のVODで学習するとのことであるが，この場合の出欠確認方法は？

【回答】　e-Learningにおける出欠確認と同様で，課題の提出等を出欠代わりにしている場合が多い．

付録７　定期試験について

【質問】　定期試験はそれぞれの大学で行われるのか？

【回答】　定期試験を実施する場合は，原則授業を開講している大学で行うことになっているが，状況により，受講生のいる大学で，各大学のTAあるいは事務担当者が監督者となり実施する場合もある．

付録８　VODでの単位認定について

【質問】　VODのみの場合，単位認定はしているのか？

【回答】　本日の報告にはないが，コンソーシアムの単位互換授業の中には，完全なe-Learning 形式のものもある．VODの画面を見て，それにeChes[3] と言うLMSの中で必要な課題等を与えて，通常の e-Learning の単位認定と同じ方法で認定すると言うものがある．また，遠隔の配信授業に関しては，１，２回程度の授業に出られない時の補完として，VOD を利用しており，すべてと言う形ではない．すなわち，全てVODの利用を想定する場合は，当初から e-Learning として単位認定できるような配慮をして単位を付与しており，どちらの方式でも，質を保証できるようになっている．

【質問】　VOD で単位認定をする場合，ペーパーテストのようなものを課しているのか？

【回答】　基本的にはそうである．ただし，毎回小テストを実施しそれの積み上げで成績を付ける方が，実際には理想的なものであるし，e-Learningの場合，これは不可欠であるので，それを用いる場合も多い．

【質問】　その場合，受講生の確認はどうなっているのか？

【回答】　これは，受講生を信じるしかない．普通のe-Learningでも同じような問題があるので，これについては，要は大学の授業が点数をとるためではなく，自分を高めるためであり，そういう不正をして単位をとっても無意味である，と言うことを学生に認識してもらうことが大事である．初年次の時に，そこを教え込むことが大事である．

利用するLMSでのユーザー認証や，そのシステム上で教材・コンテンツを視聴した履歴などを管理する機能は整っているが，他人が偽ってログインしていないかどうか，指紋認証等をしない限り確認は無理であるので，その点は，学生が自分で学ぶとは何なのかを認識する以外にない．

付録９　教材・コンテンツの撮影・作成

【質問】　授業録画でVODを作製した場合，編集をするのか？

【回答】　授業録画のVODの編集は可能である．しかし，全部で24科目あるので，逐一対応するのは困難であるということと，授業が生モノであり，実際リアルタイムで編集できるものではないので，できるけれどもやっていないと言うのが現状である．

【質問】　報告で，スタジオでの録画と言うのがなかったが，それはどうしてか？

【回答】　基本的に遠隔講義システムでは，スタジオ録画はない．

【質問】　「たてなおしの英語」におけるコンテンツ作成で，授業での録画と言うのはあったが，スタジオで別途撮影するという手法は取っていないのか？

【回答】　今のところやっていない．教材のパワーポイントについては，音声だけを付けたものであり，スタジオ撮影せずに，教材化している．

コンソーシアム全体では，現在，教材としているものは，すべて教室で録画したものをコンテンツとして提供しているものである．このシステム自体にある教室のカメラで配信した映像を記録できるシステムを用いてコンテンツ化している．それ以外で，スタジオで撮るのは，ビデオシラバスのみである．

【補足】　ドイツ語の授業で，発音練習を補ったと報告したが，来年度４月から発音に関して短いサンプルのビデオを，授業以外でも利用できるようにスタジオで撮って，口の形や音を示すことのできる副教材の作成を予定している．

【質問】　大学の教育と言うものは，基本は，教員の熱いものを望む学生に与えると言うことではないかと思う．ぜひ学生にこういうことを伝えたいと言う思いが実現するように努力することが大事である．特にこういう IT 機器を使って行う場合，音声に関しては問題ないと思うが，画面に関しては，なかなか集中しきれないなという風にも感じるが，例えば明るさの問題とかカメラの焦点をどこに合わせるかとか，問題もあるかと思う．その点の今後の発展性について，どう考えているか？

【回答】　信州大学では，コンソーシアムができる前から SUNS と言うシステムを運用している．このシステムは，20 年以上前から利用しており，最初はマイクロウェーブのかなり遅い回線を使っていて，音声がずれたり，画面のフレーム数も少なくぎこちない動きになっていた．それに比べると，今のシステムは随分良くなったのであるが，それでもまだまだ人間の感覚に比べれば，十分でないことは否定できない．難しい部分もあると思うが，主にカメラについては，ハイビジョンであるとか高画質，高音質であるものを取り入れて，より臨場感を増すと言うことで，学習の集中力を増すと言うことは先行研究で明らかである．それ以外では，等身大の教師をプロジェクターで映して授業を行うとか，なるべく通常の対面授業に近い形で実施すると言うような形も質の向上に寄与するものと思う．やはり，効果を上げるにはそれ相応のシステムが必要であるので，費用対効果のことも考慮しつつ対応していかなければならない．

【意見】　カメラワークの改善について，教員は，カメラをセルフコントロールしたらどうか？

【回答】　カメラのコントロールについて，カメラのパンニング，ズーミングについては，システムのコントローラで可能である．また，発信サイト以外のカメラのコントロールも同様に，発信サイトから行えるように本年度改良した．今回のフォーラムでは，あえて，このような技術的な面には焦点を当てていないが，要望があれば技術面に焦点を当てたフォーラムも企画したいと思う．

【意見】　No.２のカメラを学生に渡して欲しい．

【回答】　カメラの配置を工夫すれば，可能である．今後の参考にしたい．

付録 10　スマートフォン・携帯電話への対応

【質問】　今後の話になると思うが，スマートフォンとか携帯電話を利用したような，いわゆるモバイル e-Learning などへの考えはないのか？

【回答】　現在利用している eChes と言うシステムは Moodle であり，モバイル対応が十分ではない．これについては，多分その内対応して来ると思う．その際には，コストの問題が出てくるであろう．また，コンテンツの視聴に関しては，携帯電話経由ではちょっと無理かもしれないが，スマートフォンであれば，何とかなると思われる．実際，今回のフォーラムで利用した C-Learning[4] と言うシステムは，ベースが携帯電話で，スマートフォン用のインターフェースになっており，教材配信等もできるので，コストはかかるものの，今後の課題になると思われる．例えば，青山学院大学[5] の例が先進的で，１学部の全学生に iPhone を配布して利用している．その辺の先行事例を見ながら，徐々に進めていく所存である．

References

１）Shinshu Ubiquitous Network System の略，http://iicweb.shinshu-u.ac.jp/html/iic_web/folder20/suns.html

２）2006 年度採択文部科学省現代 GP「自ら学び，学び続ける人材育成の基盤形成」，http://www.shinshu-u.ac.jp/faculty/general/special/kien/kien.html

３）遠隔授業に用いている LMS の愛称：E-Learning for the Consortium of Higher Education in Shinshu，http://eches.shinshu-u.ac.jp/lms/

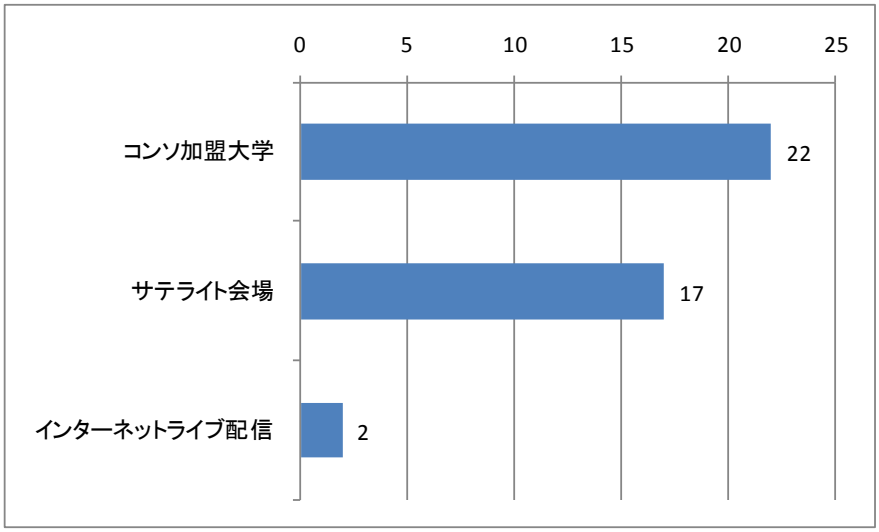
４）http://www.c-learning.jp/

５）http://www.aoyama.ac.jp/news/361.html

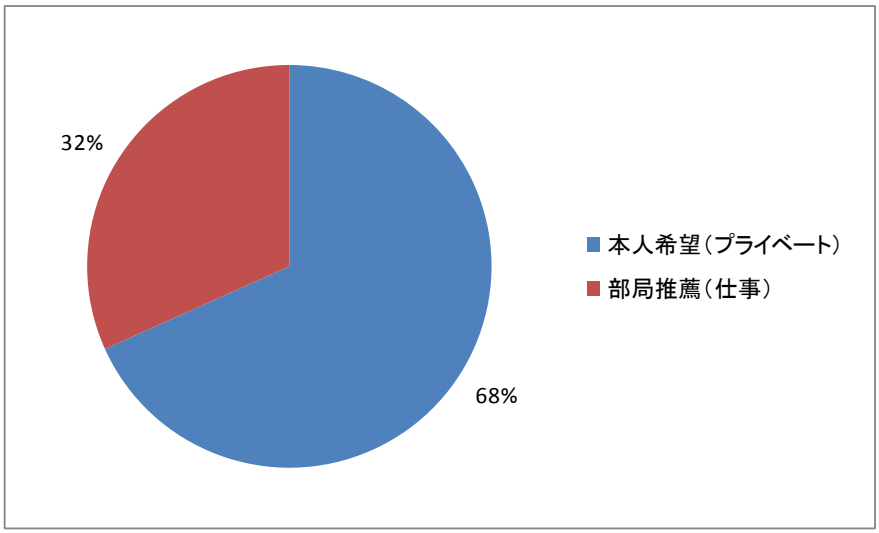
資料．FD フォーラムアンケート集計結果

（有効回答数：41）

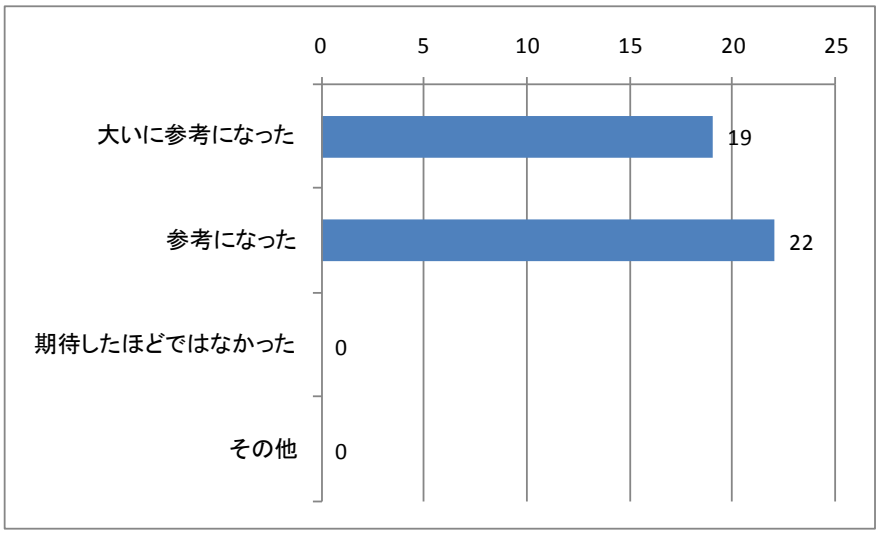
1.　参加形態・会場など



2.　参加した理由について



3.　基調報告の内容はいかがでしたか



4.　上記３のお答えの理由を，可能な範囲でお書きください（丸括弧内数は類似回答数）

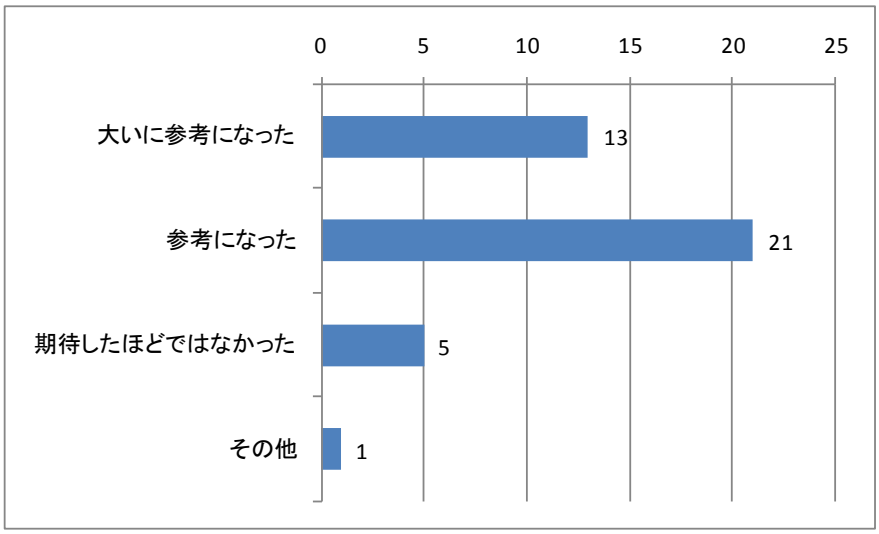
(1)　大いに参考になった

- 他団体の（遠隔講義）運用方法や問題点，解決策等今後の参考にするため（9）
- 先生方が大変なご苦労や工夫をされていることが分かりました。先生方も学生と同じことに不便を感じて，なんとかしようと工夫してくださったことが分かりました。
- 近年は生涯学習，地域貢献なども大きなテーマであるため，それらにも直接つなげられる可能性があるシステムであることがよくわかりました。また，先生方の苦労が伝わり，その分熱意も感じられました。
- 語学やゼミ形式，グループワークなどさまざまな形態の実践を聞くことができたので。
- コンソーシアムのような複数の大学による共同的な授業を遠隔授業で実施する事例として大変参考になりました。
- 参加者のご意見をたまわって

(2)　参考になった

- 各授業の遠隔授業を行う上での利点，問題点や工夫が明かになった。（3）
- 学生への周知方法，遠隔授業の利点，欠点を具体的に知ることができた。
- 同じ悩みを持つ他大学の取り組みを知り，ヒントとなった。
- システムの概要がよく理解できた
- 遠隔授業を配信を始めたばかりなので，（講義のやり方）募集方法，授業評価等参考になった
- 講義形式ではないやり方を知ることが出来ました。
- 説明が速すぎる報告もあった（私の能力不足…）
- 理数系科目の取り組みがあればよかった。

5.　パネルディスカッションの内容はいかがでしたか



6. **上記５のお答えの理由を，可能な範囲でお書きください（丸括弧内数は類似回答数）**

(1) 大いに参考になった

- 他団体の運用方法や問題点，解決策等今後の参考になったため（5）
- 活発な意見交換により，課題などの共有も改めて行われたと思います。今回は遠隔システムに慣れた方々の参加という印象があり，そのためか意見のやり取りもスムーズであり流れもよかったのかもしれません。（逆にそうでない場合の進行には更なる工夫が必要かもしれません）
- 基調講演では授業にまつわる話が中心でしたが，パネルディスカッションでは実際に運用する上で苦労したこと，今後の課題などが大変参考になりました。
- 字が読めません
- 改めて考え直す機会となった
- 進行のテンポがよかった。多くの課題について，ピンポイントで解決されていた。

(2) 参考になった

- こまかいところがよく分かりました。
- 授業を“する側”の考えていることだけでなく，“受ける側”の考えていることを聞くことができ，参考になった。メリットばかりでなく，もう少し，今後考えるべき課題を出してもらえると，逆に参考になる点が多かった気がする。
- 疑問に思っていたこと（出欠の確認等）が明らかになった。
- 信州での状況が理解できた
- 岡山からの質問に時間を取っていただいた
- 基調報告をもっと具体的に知ることができ，興味深かったです。
- 画面表示がコンテンツのみになっていたのが残念。
- 上記 4 についての解説，やりとりがあった。
- 可能性の範囲がある程度わかりました。
- ビデオ配信の有効性，“講義とは？”について伺えるから。

(3) 期待したほどではなかった

- 運営に対する質問が多かったので。もう少し FD について聞きたかった。
- 本コンソ以外からの参加があったが，本コンソの取り組みに対する質問が多く，あまり有意義なディスカッションとならなかったような気がした。

(4) その他

- 先生方間でのディスカッションの時間が第一となります。

7. **今回のフォーラムによって，遠隔授業に対する印象に変化などありましたか（丸括弧内数は類似回答数）**

- 大きく発展する可能性を感じた。(2)
- いろんなことができるということ，しかし担当者に大変な負担があるという点の認識を新たにしました。
- 遠隔講義には，大きな利点と制限があり，これらを事前に理解することこそ遠隔講義を実施する上で重要であることを実感しました。
- 遠隔授業そのものの技術的な可能性が明らかになった点はよかった。それよりも整えるべきは，取り組む上でのルール作りという点は，考えてみたこともない課題だった。
- 遠隔授業の授業の核心である「その場に行かないでも授業を受けることができる」ということが，現在では双方向性が可能になり単なる通信教育のようにならないようにすることができることを実例によって改めて感じることができました。
- 遠隔授業をやってみて問題点を考えていきたい
- 遠隔地で受講する学生の受講意識の差に対応できるか。結論が得られていない。
- 思っている以上に幅広い活用方法があることが分かり，参考になりました
- 気さくに質問できることを知り，より身近に感じることが出来ました。
- 講義以外の形式でも，いろいろとやり方があることを知ることができてよかったです。
- 講義科目も工夫をすれば，十分遠隔授業を行えると感じたこと。
- これまで知りえなかった授業への取り組み方が聞けました。(会場の巡回等)
- 困難だと思った。これだけ準備して，最初からつながらないことが起こると大変な点を感じた。
- 参考にして，実施に移行したいと考えています。
- 少し変化した。遠隔授業がより具体的にイメージできるようになった。
- 変化があった。工夫の方法により，教育効果をかなり上げることができることが分かった。
- 利点を使いこなせるようになりたいですが…
- 田村先生のパワーポイントがすばらしい。短く要点のみ。

8. **今回はサテライト会場やネット配信を併用した開催形態をとりましたが，いかがでしたか（丸括弧内数は類似回答数）**

(1) コンソーシアム加盟大学

- 臨場感があって大変よかったです。(2)
- eChes システムに合った形態でよかったと思う。
- 遠隔授業に対する問題意識のあるグループが情報を共有できたことがよかった。
- 居住地の近くから気軽にフォーラムに参加できることが，更に同じフォーラ

ムに全国から参加者がいることが，授業やフォーラム・シンポジウムの新しい形を肌で実感でき良かったです。画面も見やすく，音声もほぼクリアに聞こえ，臨場感もきちんと感じられました。

- ご準備ご苦労さまでした
- 大変参考になりました
- たいへん良かった。一時的に映像配信上のトラブルはあったが，それをその場で対処できるという点は見習いたいと感じた。
- 他会場からの質問については事前に聞いておき，司会側で調整した方が良いと思う。パネリストの討議をもう少し聞きたかった。
- 沢山の選択の余地があり便利に感じた。（ただ本会場の方がより質問ができるとリアリティがより感じられると判断したため本会場に参加）
- トラブルが起こるものと考えた方がよいと思いました。
- マイクを使うためか，聞き取りにくいことがあり，残念でした。

(2) サテライト会場

- 今さらながらだが，授業を行う側と受ける方でそれぞれ感じる感覚の違いを再認識した。
- カメラプロデューサーが必要，不要な音声（雑談）が流れてくる。
- 今回の通りで結構です。
- サテライト会場でネット接続ができない場合，質問を出す事が難しい（発言しづらい)。パネルディスカッションの際，コンテンツではなくパネラーの映像を配信してほしいと思いました。
- 対面シンポジウムとかわりなく，良いシステムと思う
- 他大学の現状や問題点を共有することができ，大変良かったと思います。
- 他地域での取り組みを全体的に見えるので良かったです。
- 近くで参加することができ，負担が減り，大変ありがたく思っています。
- 途中から，スクリーンのメインが web ブラウザ画面になったままだった点。切り替えはできないのでしょうか。
- とても良いこころみと思います。もう少し安定した接続だと良いように思います。

(3) インターネットライブ配信

- ネット配信によってまさに「その場に行かないでも参加できる」ことは大変よかったと思いました。C-Learning との組み合わせで質問することも可能であり遠隔地で開催される貴重なイベントに参加する新しい形態の一つであると思います。

9. 今回の FD フォーラム全体についてのご感想，およびコンソーシアムの FD の在り方についてご意見をご記入ください

- サテライト会場からの発言が行いにくいことがあった。途中からパネラーの映像が映らず，HP ページ表示のみとなり，音声でしか分からなかったことがあった。
- フォーラムの件ではないのですが，録画で受講する場合にリアルタイムではディスカッションに参加できないと思われる。ディスカッションの様子だけが配信されてしまうという問題点が生じるのではないか。
- 授業公開の観点
- 今後にも期待しています。
- 全国的な参加はして欲しい
- 大変興味深いフォーラムに参加させて頂き，ありがとうございました。今後機会があれば，インターネットライブ配信を利用したいです。
- 今後のコンソの在り方等について討議を行うなどしても良いと思う。（FD で）
- eChes の具体的な運用についての話か資料がもう少し欲しかった。特に LMS の説明について。
- フォーラムの内容，大変良かったと思います。実際に講義を配信している教員等にも参加してもらいたかったのですが，出席者が担当委員に限られる傾向にあり，フォーラムの内容を教員やその他職員に伝えることが難しいのが問題点だと思います。いかに大学に持ち帰って周知徹底を図るか，考えていきたいと思っています。
- 遠隔授業でも経験が，予期していなかったかもしれない FD 活動になることが基調報告で複数の先生方から語られていたことは，FD を進める上での大変参考となる事例であり，そのようなお話を伺えたことはとても有意義でありました。パネルディスカッションでは，「授業の質」に話が偏ったという意見もありましたが，今回は FD フォーラムでありましたのでそれがよかったかと思いました。もちろん，システムの運用上の課題などは大変重要な情報でありますので，FD を進める上での課題，コンソーシアム活動上の課題として，別の機会に改めて設けていただければ，ぜひ，お聞きしたいと思います。今回は大変貴重なフォーラムを開催いただきありがとうございました。
- これからの大学の講義について考えることができ参考になりました。
- 遠隔講義は担当者の FD になるというのは全くそのとおりだと思いました。遠方から参った甲斐がありました。参考にさせていただきます。
- FD の試みとして，複数大学内での意見交換が可能となるこの方法に期待。
- 大人数授業時の問題点
- 学生参加のスタイルや形式にとらわれない形態を模索し，今後の発展につなげたい。

（補足）参加者数内訳

分類	大学・組織名	参加者数
コンソーシアム加盟大学	信州大学（松本）	20
	清泉女学院大学	7
	諏訪東京理科大学	7
	松本歯科大学	2
	佐久大学	1
	長野大学	1
サテライト会場	岡山オルガノン	
	岡山商科大学	17
	岡山大学	1
	大学コンソーシアム京都	4
インターネットライブ配信		35
合計		95

遠隔配信♪

第3回FDフォーラム

★参加無料！学生の参加も歓迎！
★インターネットライブ配信！
★サテライト会場募集中！

2011年1月22日(土)

14:00～16:30（接続開始13:30）

大学連携における遠隔授業配信

～実践事例紹介と将来的展望～

メイン会場　信州大学松本キャンパス 全学教育機構211番演習室

受信会場　高等教育コンソーシアム信州加盟大学遠隔講義室，
サテライト会場（募集中），インターネットライブ配信

第1部　基調報告

森下孟（信州大学），松岡幸司（信州大学），宮越幸代（長野県看護大学），
田村亮子（清泉女学院大学），加藤鉱三（信州大学），

第2部　パネルディスカッション

コーディネーター　矢部正之（信州大学）

お申し込み，お問い合わせ先
高等教育コンソーシアム信州事務局　tel　0263-37-2427，　mail　office@c-snet.jp

高等教育コンソーシアム信州
The Consortium of Higher Education in Shinshu
http://www.c-snet.jp/

高等教育コンソーシアム信州　第３回FDフォーラム

大学連携における遠隔授業配信～実践事例紹介と将来的展望～

高等教育コンソーシアム信州では，「相互補完型大学連携」の実現を目指し，大学間遠隔講義システムを活用した遠隔授業が今年度よりスタートしました。この取り組みを通して，連携大学内の学生達は，学生自身が所属する大学で開講されていない講義を比較的容易に受講することができるようになりました。今後，遠隔授業配信は，連携大学間における「教育のクロスロード」の役割を果たしていくものと考えられます。

そこで，今回のFDフォーラムは，「大学連携における遠隔授業配信」をメインテーマに開催します。今回のFDフォーラムでは，今年度遠隔授業を担当した4名の教員が，講義型／双方向型両方の講義スタイルからそれぞれの遠隔授業の事例を報告します。また，大学連携とICT活用指導の観点から，LMS（Learning Management System）や授業収録コンテンツ（Mediasite）の活用法についても事例紹介を行う予定です。
教員による事例紹介の後は「遠隔授業の将来的な展望」について，パネルディスカッション形式により参加者の皆様とご一緒に議論させていただきます。遠隔授業の方法にご興味のある方，遠隔授業の将来的展望にご関心のある方のご参加をお待ちいたしております。

日時：2011年1月22日（土）14：00～16：30（接続開始13：30）

メイン会場：信州大学松本キャンパス 全学教育機構211番演習室

受信会場：高等教育コンソーシアム信州加盟大学遠隔講義室※，
サテライト会場（募集中），インターネットライブ配信
※長野県看護大学を除く

主催：高等教育コンソーシアム信州

第１部　基調報告

森下孟（信州大学）	：システム運営管理者
松岡幸司（信州大学）	：ドイツ語（初級）Ⅰ，Ⅱ
宮越幸代（長野県看護大学）	：国際看護学
田村亮子（清泉女学院大学）	：英語基礎Ⅰ，Ⅱ（たてなおしの英語）
加藤鉱三（信州大学）	：新聞と私たちの社会

第２部　パネルディスカッション　　コーディネーター　矢部正之（信州大学）

〇当日の資料について
開催日の約1週間前から，高等教育コンソーシアム信州のホームページでダウンロードすることができます。
〇参加申し込みについて
参加希望の方，サテライト会場での受信申し込み，メイン会場以外での参加希望，インターネット受信を希望される方は，1月14日（金）までに下記までご連絡ください。

お申し込み，お問い合わせ：高等教育コンソーシアム信州事務局
tel：0263-37-2427　e-mail：office@c-snet.jp

2010 年度 FD フォーラム成果報告集

大学連携における遠隔授業配信
～実践事例紹介と将来的展望～

2011 年 2 月　発行

編集・発行

高等教育コンソーシアム信州

長野県松本市旭 3-1-1　信州大学内
TEL　0263-37-2427
E-mail　office@c-snet.jp
URL　http://www.c-snet.jp/